東アジア都市における集団とネットワーク

伝統都市から近現代都市への文化的転回

要　旨　集

大阪市立大学文学部創設60周年記念

「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」
総括シンポジウム

日　　程　2013年12月6日(金)・7日(土)

会　　場　大阪市立大学杉本キャンパス
学術情報総合センター
文化交流室(1F)、AVホール(5F)

第1日　12月6日(金)

◉ 全 体 会　**9:30～11:40**　文化交流室
挨　拶　西澤　良記・大阪市立大学学長
趣旨説明　仁木　宏(大阪市立大学) ―― 1
記念講演　吉澤誠一郎(東京大学)　「近代天津の貿易とその後背地」 ―― 3
宮嶋　博史(成均館大学)　「戸籍大帳を通じてみた朝鮮時代の都市:研究史の概観」 ―― 5

◉ 第1会場　**13:00～17:00**　文化交流室
久保田和男(長野工業高等専門学校)「北宋都城開封の形成と文化創造ー社会集団としての軍人と都人」 ―― 7
渡辺　健哉(東北大学)　「元の大都における宗教空間」 ―― 9
美川　圭(立命館大学)　「日本の中世都市の構造ー政治と文化・宗教ー」 ―― 11
仁木　宏(大阪市立大学)　「社会集団からみる中世京都」 ―― 13
唐　力行(上海師範大学)　「16世紀以来長三角地区経済社会的整合与発展」 ―― 15
野崎　充彦(大阪市立大学)　「15世紀朝鮮における<儒>の位相――『慵斎叢話』の世界から」 ―― 17

◉ 第2会場　**13:00～17:00**　AVホール
神田　由築(御茶の水女子大学)「都市大坂と芸能文化ー浄瑠璃・祭礼など」 ―― 19
松浦　恆雄(大阪市立大学)　「聴衆から見た電化教育ーラジオドラマを中心にー」 ―― 21
洪　煜(上海師範大学)　「城市之声:近代上海媒介下的蘇州評弾」 ―― 23
呉　強華(上海師範大学)　「近代江南士人的戯曲改良活動与民衆教化:以南社為中心的考察」 ―― 25
浅野　秀剛(大和文華館)　「吉原の女芸者の誕生ー付、描かれた女芸者」 ―― 27

第2日　12月7日(土)

◉ 第1会場　**10:10～14:20**　文化交流室
柳　静我(鳥取大学)　「清代、辺境都市打箭爐の形成と発展」 ―― 29
塚田　孝(大阪市立大学)　「都市社会史の方法ー日本近世都市史研究の展開と大坂ー」 ―― 31
邱　澎生(香港中文大学)　「十九世紀前期重慶城債務訴訟中的「証拠」問題」 ―― 33
孫　慧敏(中央研究院)　「賃居者的城市:近代上海房屋租賃法文化的形成与拡散」 ―― 35
高　東煥(KAIST大学)　「朝鮮時代における都市概念と都市の位階」 ―― 37

◉ 第2会場　**10:10～14:20**　AVホール
徐　茂明(上海師範大学)　「清末新政与地方商権意識的萌発ー以蘇州醤業"抗捐"為中心」 ―― 39
林　美莉(中央研究院)　「「政協」対近代上海歴史的建構ー以文史資料工作為中心」 ―― 41
車　喆旭(釜山大学校)　「前近代軍事都市から近代植民都市への変化ー慶南統營の事例を中心にー」 43
橋谷　弘(東京経済大学)　「東アジアにおける植民地都市の近代性」 ―― 45

◉ 全体会　**14:30～17:00**　文化交流室
問題提起　井上　徹(大阪市立大学) ―― 47
佐賀　朝(大阪市立大学) ―― 49

趣旨説明

仁木　宏（大阪市立大学　プログラム主担当研究者）

本シンポジウムは、日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム（Strategic Young Researcher Overseas Visits Program for Accelerating Brain Circulation）」による研究プログラムによって３年間にわたって研究してきた成果をまとめ、今後の研究の発展を目指して開催するものである。

大阪市立大学大学院文学研究科の当該プログラムは、「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」（Historical Formation and Cultural Creativity of East Asian Cities）をテーマとする。本プログラムでは、若手研究者を長期にわたって海外のすぐれた研究機関に派遣するとともに、担当教員が中心となって、海外の協力機関とともに、国際共同研究を遂行してきた。

協力機関は、中国の上海師範大学、台湾の中央研究院、韓国の釜山大学校である。各機関からは、本シンポジウムにも多くの研究者を派遣していただいた。

本シンポジウムは、「東アジア都市における集団とネットワーク　－伝統都市から近現代都市への文化的転回－」をテーマとする。日本・中国・韓国における、前近代から現代にかけての都市の変容を、社会集団、宗教・文化・演劇など多様な側面から明らかにし、都市文化研究の新たな可能性を探ることを目標としている。

全体は、２本の記念講演と、２０本の報告からなる。最後の全体会では、問題提起をもとに総合討論をおこなう。

２日間の長丁場であるが、報告者のみなさま、会場に参加のみなさまの御協力によって本シンポジウムが成功にいたりますよう、よろしくお願い申し上げます。

主旨说明

仁木 宏（大阪市立大学 项目主要担当研究者）

在受到了日本学术振兴会为期三年的“加速头脑循环的年轻学者战略性海外派遣项目（Strategic Young Researcher Overseas Visits Program for Accelerating Brain Circulation）”的支持之后，本次专题研究会的举办，主要是为了总结目前为止所取得的研究成果，以及展望今后的研究方向。

大阪市立大学大学院文学研究科承办的此研究项目，是以“东亚都市的历史性形成和文化创造力（Historical Formation and Cultural Creativity of East Asian Cities）”为主题的。在开展中，不仅派遣年轻的学者长期到国外优秀的机关从事研究，更是以研究科的教员们为中心，推进了与国外合作机关的国际化共同研究。

我们的合作机关涉及了中国的上海师范大学，台湾的中央研究院，韩国的釜山大学校。这些合作机关这次也派遣了很多学者，参与到了本次专题研讨会之中。

本次研讨会设定主题为“东亚都市的集团和网络－从传统都市向近现代都市的文化型转变－”。即希望通过社会集团、宗教、文化、戏剧等多方面的变化，来阐明日本、中国、韩国横跨前近代到现代的都市演变，从而探索出都市文化研究的新的可能性。

这次共由 2 场纪念演讲和 20 场报告构成我们的研讨会。在最后的总会上，将会提出整体问题以及在此基础上进行综合讨论。

虽然会期较长，将延续两天，但是依旧希望得到与会同仁的鼎力支持，让本次研讨会圆满举行。

주지설명

니키 히로시 (오사카시립대학. 프로그램 주 담당 연구자)

본 심포지엄은 일본학술진흥회「두뇌회전이 빨라지는 청년연구자 전략적 해외파견 프로그램（Strategic Young Researcher Overseas Visits Program for Accelerating Brain Circulation）」에 의한 연구 프로그램에 따라 3 년에 걸쳐 연구한 성과를 집약, 향후 연구 발전을 목적으로 개최하는 것입니다.

오사카시립대학 문학연구과의 담당 프로그램은「동아시아 도시의 역사적 형성과 문화 창조력」（Historical Formation and Cultural Creativity of East Asian Cities）을 테마로 합니다. 본 프로그램에서는 청년연구자를 장기에 걸쳐 해외의 우수한 연구기관에 파견함과 동시에 담당교원이 중심이 되어 해외의 협력기관과 함께 국제 공동 연구를 수행해 왔습니다.

협력기관은 중국의 상해사범대학, 대만의 중앙연구원, 한국의 부산대학교입니다. 각 기관에서는 본 심포지엄에도 많은 연구자들을 파견해 주셨습니다.

본 심포지엄은「동아시아 도시의 집단과 네트워크 – 전통도시에서 근현대도시로의 문화적 전환 – 」을 테마로 열립니다. 일본・중국・한국의 전근대에서 현대에 걸치는 도시의 변용을 사회집단, 종교・문화・연극 등 다양한 측면에서 고찰하여 도시문화연구의 새로운 가능성을 모색하는 것을 목표로 합니다.

프로그램은 2 편의 기념 강연과 20 편의 발표로 진행됩니다. 마지막 전체 회의에서는 문제제기를 바탕으로 종합 토론이 있을 것입니다.

이틀간의 대장정이 되겠습니다만, 발표자 여러분, 그리고 회장에 오신 참가자 여러분들의 협력에 의해 이번 심포지엄이 성공할 수 있도록 모쪼록 잘 부탁 드립니다.

Explanation of aim

Niki Hiroshi (Osaka City University, Chief researcher)

The aim of this symposium is to bring together the result of three years research accomplished through a research program carried out by the Japan Society for the promotion of Science called "Strategic Young Researcher Overseas Visits Program for Accelerating Brain Circulation" with the hope for the development of future studies.

The theme of this program carried out by the graduate school of literature and human science in Osaka City University is "Historical Formation and Cultural Creativity of East Asian Cities". In this program, we have been conducting international joint research with overseas cooperative institutions lead by faculty members as well as sending young researchers to overseas distinguished research institutions.

The theme of this symposium is "Groups and Networks in East Asian Cities - Cultural turn from traditional cities to modern and contemporary cities". The aim of this symposium is to search for new potentialities in the urban culture research by revealing the transfiguration of cities from pre-modern age to contemporary age in Japan, China and Korea through diverse research on social groups, religion, culture and drama etc.

The symposium consists of two lectures and twenty report sessions and synthesis discussion will be held at the last general session.

Although this is going to be a long two days symposium, I am hoping to receive your kind cooperation for this symposium to be a success.

近代天津の貿易とその後背地 （要旨）

吉澤誠一郎

1860 年代以降、天津は外国貿易に対して開かれた。その結果として、対外貿易と密接な関係をもつ後背地が形成された。本報告では、とくに羊毛貿易に着目し、生産地にあたる黄河上流地域と天津とをつなぐ流通、そして、これら内陸地域における都市商業の展開について考えてみたい。

そもそも牧羊は中国大陸では古来行われてきたが、羊毛が高い商品価値を持つようになったのは、19 世紀後半からの対外輸出のためであった。アメリカ合衆国などの海外需要が、羊毛を国際市場むけの商品としたのであった。外国商社は豊富な資金力をもって、羊毛を買い集めようとした。

20 世紀初めまでには、西寧が良質な羊毛の集積地として知られるようになった。この近くの高原地帯に住む牧民は、チベット系(ないしモンゴル系)の人々であった。彼らとの関係を維持して、綿布などと交換することで羊毛を入手していたのが、イスラームを信仰する回民の人々である。回民は羊毛を手に入れると駱駝または黄河の流れを利用して、包頭まで運んだ。このような羊毛交易によって包頭も都市的な発展をみせることになった。

羊毛はさらに包頭から天津まで運ばれて海外に輸出された。こうして、天津は甘粛・青海などの内陸地域と国際市場とを経済的に結びつける役割を担った。しかしそれだけでなく、天津に羊毛が豊富にもたらされたことは、天津における毛紡織や絨毯製造といった新たな工業化の要因ともなったのである。

本報告では、開港の影響が、かならずしもその港の近傍ではなく、むしろ相当に遠方にある特産品の産地に及ぶことに注目し、流通を通じた都市形成がひとつの連鎖をなして起こる過程について考えてみたい。また、多様な民族が暮らす西北内陸部のエスニシティのありかたと商品生産・商品流通の関係についても示唆を得ることをめざす。

近代天津的贸易及其腹地（要旨）

吉泽诚一郎

1860 年代以后，天津开埠通商，直接促使了受此贸易影响的腹地的发展和形成。本次报告，主要藉由分析羊毛贸易，来审视和考察作为生产地的黄河上游地区与天津的流通结构，以及这些内陆地区的都市商业的发展。

虽说在中国大陆，牧羊自古有之，但是使羊毛成为高价商品的原因，是 19 世纪后半期开始的对外出口。是来自美国等地的海外需求，让羊毛开始成为适应国际市场的商品。外国公司亦凭借雄厚的资金力量收购羊毛。

到 20 世纪初为止，西宁因为成为了优质羊毛的集散中心而远近驰名。居住于西宁附近高原地带的牧民，多为藏人（或是蒙人）。而和他们保持关系，以棉布等物品来易取他们的羊毛的，正是信仰伊斯兰教的回民。一旦他们得到羊毛，就会利用骆驼或者是黄河来载运至包头。因此，可以说包头等地的城市化进程正是受惠于这样的羊毛贸易。

而羊毛会再从包头被运往天津，进而从天津出口海外。像这样，天津在经济层面上起到了联系甘肃、青海等内陆地区和国际市场的作用。然而，不仅于此，羊毛在大量流入天津之际，也意味着给天津的毛纺织和绒毯制造等新的工业带来了发展的动因。

本次报告，将着重阐述开埠之举，不仅影响港口周边地区，更是带动了边远地区生产特产品的产地，同时将考察藉由流通促成的都市发展，逐步成为一条连锁链的具体过程。另外，也可以试着厘清，在诸多民族共生的西北内陆地区的民族意识与商品生产、商品流通之间的关联性。

근대 톈진의 무역과 그 배후지

요시자와 세이이치로

1860 년대 이후 톈진 (天津)은 외국 무역에 개방되었으며 그 결과 대외무역과 밀접한 관계를 가진 배후지가 형성되었다. 본 발표에서는 특히 양모무역에 의거하여, 생산지에 해당하는 황허 (黃河) 상류지역과 톈진을 잇는 유통 및 이들 내륙지역에서의 도시상업의 전개에 관하여 고찰하려고 한다.

원래 양목은 중국 대륙에서 예로부터 행해져 왔는데, 19 세기 후반 이후의 대외수출되면서 양모가 높은 상품가치를 가지게 되었다. 미국 등의 해외 수요가 양모를 국제시장을 위한 상품으로 만들었고, 외국계 상사는 풍부한 자금력을 가지고 양모를 사들이고자 했다.

20 세기 초엽까지는 시닝 (西寧)이 양질의 양모의 집적지로서 알려지게 되었다. 부근의 고원지대에 사는 목민_牧民은 티벳계 (내지 몽골계) 사람들이었다. 그들과 관계를 유지하여 면포 등과 교환하면서 양모를 입수했었던 것이 이슬람을 믿는 회민_回民들이다. 회민은 양모를 손에 넣으면 낙타 및 황허의 흐름을 이용새서 바오터우 (包頭)까지 날랐다. 이러한 양모교역에 의해 바오터우 역시 도시적인 발전을 보이게 되었다.

양모는 바오터우에서 톈진까지 운반되어 해외에 수출되었다. 이렇게 톈진은 간쑤 (甘肅)・칭하이 (青海)등의 내륙지역과 국제시장 사이를 경제적으로 연결하는 역할을 하였다. 뿐만 아니라, 톈진에 양모가 풍부하게 공급된 것은 톈진에서 모 방직 및 융단 제조 등 새로운 공업화가 이루어지는 요인이 되기도 했다.

본 발표에서는 개항이 반드시 항구 근방에서가 아니라 오히려 상당히 떨어져 있는 특산품 산지까지 영향을 미친다는 점에 주목하여, 유통을 통한 도시형성이 하나의 연쇄작용을 일으키는 과정에 대해 고찰하려고 한다. 또한, 다양한 민족이 생활하는 서북내륙부의 에스니시티의 모습과 상품생산・상품유통의 관계에 대해서도 새로운 관점을 밝히고 싶다.

Modern Tianjin: Trade and Its Hinterland

Yoshizawa Seiichiro

Tianjin was opened to foreign trade since the 1860's. As a result, the hinterland which had close relationship with international trade was formed. This paper focuses on wool trade, which connected Tianjin and the region of the upper Yellow River, and it also discusses the commercial development in inland cities.

Wool became a highly profitable product in the latter half of the nineteenth century as a result of foreign export. Indeed, the foreign demand from countries like the United States made wool a product for the international market.

Until the dawn of the twentieth century, Xining was well-known for its wool of high quality. Most of the shepherds who lived in the nearby plateaus and highlands were the Tibetans and the Mongols. Hui Muslims maintained a close relationship with the highland shepherds, exchanging cotton cloth for wool. The Hui people then transported the wool as far as Baotou, using either camels or ships. Through its connection with these trading routes, Baotou enjoyed considerable commercial development at this time.

From Baotou, wool was further transported to Tianjin, where it was exported overseas. In this way, Tianjin economically connected inland regions like Gansu and Qinghai to the international market. Tianjin's role in the wool trade also contributed to its own industrialization through carpet manufacturing and wool spinning.

This paper aims to understand how overseas trade formed a chain of cities through the transportation of goods and what kind of economic roles the ethnic diversity played in the northwestern inland region.

戸籍大帳を通じてみた朝鮮時代の都市：研究史の概観

宮嶋博史（成均館大学校東アジア学術院）

朝鮮王朝時代には３年ごとに全国的な戸籍大帳の作成が行われた。現在もその一部が残っていて、さまざまな角度からの研究が続けられている。ここでは、朝鮮時代戸籍大帳の現存状況と、それを用いた研究について簡単に紹介したうえで、都市部の戸籍に焦点をあてて、その現存状況と研究史について概観してみたい。

現存する都市部の戸籍としては、大邱（大丘）、漢城、開城、仁川等の地域の、さまざまな年代のものがあるが、その中で特に重要であるのは、大邱府の朝鮮時代後期の戸籍と、朝鮮末・大韓帝国期の漢城府（現在のソウルの一部）の戸籍である。

大邱の戸籍は現存する朝鮮時代戸籍の中で量的にもっとも充実したものであり、戸籍研究の先駆として、現在もその意味を失っていない四方博の研究も大邱を対象とするものであった。そこに含まれている東上面と西上面というふたつの面の戸籍が現在の大邱広域市の中心部に該当する地域のもので、この地域は朝鮮時代後期から都市的性格を強く帯びていた。現在私の所属している成均館大学校東アジア学術院では、１０年計画で大邱戸籍全体のデータベース化を進めているが、都市地域のデータベース化を先行させるという方針のもと、すでに上記二つの面のデータベース化が完了して、研究者が容易に利用できるようになっている。この情報を用いた研究も始まっているが、農村地域とは異なった住民構成、都市に集住していた郷吏（行政実務担当者）層の分析、などの成果が出始めている。

漢城の戸籍は１９世紀末から２０世紀初期にかけて作成されたいわゆる新式戸籍と呼ばれるもので、京都大学に所蔵されている。首都漢城のかなりの部分を含んであり、きわめて貴重な資料であるが、この戸籍や同時期の他の資料などを用いて、住民構成、階層別の居住実態など、漢城の都市としての特徴を明らかにしようとする研究が多様に進められている。

通过户籍大帐来看朝鲜时代的城市：研究史概观

宮嶋博史（成均馆大学校东亚学术院）

在朝鲜王朝时代，每3年修订一次全国户籍大帐。其中一部分还保存至今，一直从各种各样的角度受到研究。我想在此先简单介绍一下朝鲜时代户籍大帐的现存情况以及利用它进行的研究，然后针对城市部的户籍，概述其现存情况和研究史。

作为现存的城市部户籍，有大邱（大丘）、汉城、开城、仁川等地不同年代的史料，其中尤为重要的是，大邱府朝鲜时代后期的户籍和朝鲜末期、大韩帝国时期汉城府（今汉城的一部分）的户籍。

大邱户籍是现存朝鲜时代户籍中数量最丰富的史料，作为户籍研究的先驱，至今仍有影响的四方博的研究，也是以大邱为对象。其中包括东上面和西上面这两个面在内的户籍，相当于现在大邱广域市的中心部，该地域从朝鲜时代后期开始，带有很强的城市特征。现在我所在的成均馆大学校东亚学术院，计划用十年时间推进大邱户籍整体数据库化，其中城市地域先行实施数据库化，在这一方针之下，已经完成了上述两个面的数据库化，研究者可以比较方便使用了。利用这些史料的研究方兴未艾，对不同于农村地域的居民构成、聚居于城市的乡吏（担任行政实务者）层的分析等研究成果开始问世。

汉城户籍是19世纪末至20世纪初修订的新式户籍，收藏于京都大学。涵盖了首都汉城的绝大部分，是极为珍贵的资料。使用该户籍以及同时期其他资料，来探讨居民构成、不同阶层的居住情况等，以阐明汉城城市特征的研究正得到多样化的推进。

근대 톈진의 무역과 그 배후지

요시자와 세이이치로

1860 년대 이후 톈진 (天津)은 외국 무역에 개방되었으며 그 결과 대외무역과 밀접한 관계를 가진 배후지가 형성되었다. 본 발표에서는 특히 양모무역에 의거하여, 생산지에 해당하는 황허 (黃河) 상류지역과 톈진을 잇는 유통 및 이들 내륙지역에서의 도시상업의 전개에 관하여 고찰하려고 한다.

원래 양목은 중국 대륙에서 예로부터 행해져 왔는데, 19 세기 후반 이후의 대외수출되면서 양모가 높은 상품가치를 가지게 되었다. 미국 등의 해외 수요가 양모를 국제시장을 위한 상품으로 만들었고, 외국계 상사는 풍부한 자금력을 가지고 양모를 사들이고자 했다.

20 세기 초엽까지는 시닝 (西寧)이 양질의 양모의 집적지로서 알려지게 되었다. 부근의 고원지대에 사는 목민_牧民은 티벳계 (내지 몽골계) 사람들이었다. 그들과 관계를 유지하여 면포 등과 교환하면서 양모를 입수했었던 것이 이슬람을 믿는 회민_回民들이다. 회민은 양모를 손에 넣으면 낙타 및 황허의 흐름을 이용새서 바오터우 (包頭)까지 날랐다. 이러한 양모교역에 의해 바오터우 역시 도시적인 발전을 보이게 되었다.

양모는 바오터우에서 톈진까지 운반되어 해외에 수출되었다. 이렇게 톈진은 간쑤 (甘肅)・칭하이 (青海)등의 내륙지역과 국제시장 사이를 경제적으로 연결하는 역할을 하였다. 뿐만 아니라, 톈진에 양모가 풍부하게 공급된 것은 톈진에서 모 방직 및 융단 제조 등 새로운 공업화가 이루어지는 요인이 되기도 했다.

본 발표에서는 개항이 반드시 항구 근방에서가 아니라 오히려 상당히 떨어져 있는 특산품 산지까지 영향을 미친다는 점에 주목하여, 유통을 통한 도시형성이 하나의 연쇄작용을 일으키는 과정에 대해 고찰하려고 한다. 또한, 다양한 민족이 생활하는 서북내륙부의 에스니시티의 모습과 상품생산・상품유통의 관계에 대해서도 새로운 관점을 밝히고 싶다.

Cities in the Joseon period seen through *koseki* register
– an outline of the research history

Miyajima Hiroshi

During the Joseon kingdom period, a national *koseki* register was created every three years. Some parts of it remained until today and researches from various angles are in progress. In this study, I report briefly on the status of the *koseki* register from the imperial period and studies using it. Based on this I focus on the registers in the cities and outline their current status and history of research.

The *koseki* of cities that remained until today, we have ones from different periods in regions Daegu, 漢城, Kaesong, Incheon and others. Among those, especially interesting are the registers from Daegu province dated from the late Joseon kingdom period and the late Joseon early imperial period from the 漢城 province (today part of Seoul).

The Joseon *koseki* registers from the Daegu remaining today are among the most numerous ones, and one of the still influential pioneers in the *koseki* studies, Hiroshi Shikata, uses the resisters from the Daegu as well. The register from two particular regions (面) - 東上面 and 西上面 - that are today central parts of the Daegu metropolitan city, strongly reflect the city character since the late Joseon period. In the East Asian Studies Institute of the Sungkyunkwan University, where I am currently employed, we proceed with a project to create a database of all *koseki* registers from the Daegu in 10 years. We prioritize city locations and thus, the database for already mentioned two parts (面) is already available and researchers can use this data easily. Studies using these data already started and results showing different composition of citizens from the rural areas, or analysis of 鄕吏 class (people in charge of administrative issues) moving to cities start to appear.

The *koseki* from 漢城 were compiled between the end of the 19th and beginning of the 20th century. They represented the so-called new style *koseki* and are stored at the Kyoto University. Substantial part of the 漢城 metropolis are included in it and they represent a very valuable material. Diverse studies using this material as well as other materials from the same period aim to uncover some of the characteristics of the city of 漢城 in terms of composition of its citizens or residence conditions by classes.

北宋都城開封の形成と文化創造－社会集団としての軍人と都人

久保田　和男

唐宋間の都城の変容について、これまで多くの研究者が言及してきたところであるが、都市住民を社会集団と考え、その変容として都城の変容を捉えてこなかった。本報告は、開封で初めて設けられた、本格的な外城郭・甕城や城壕により、初めて都城住民が防衛の対象になったことを指摘しつつ、都城住民と皇帝政府との関係が変容したことに言及し、そこに新しい都城文化創造の背景を探る。そのうえで、開封で生まれた都城文化が後世にどのように受け継がれていったのかを考える。

北宋都城开封的形成和文化创造－作为社会集团的军人和都人

久保田　和男

至今为止，已经有很多研究者对于唐宋间都城的变化做出探究，但是很少有人从都市居民这个社会集团的变化的层面，来审视都城的变化。本报告将指出，由于在北宋时期，开封首次正式地被设计成拥有外城郭、瓮城和城壕，因此对于都市居民来说，也是首次被正式定位为被军事防卫保护的对象，因而，都城居民和皇帝政府之间关系的发生了变化，在此背景中，开封逐渐创造出了新的都城文化。另外，本发表将在此基础上，考察在开封诞生的都城文化是如何被后代继承的。

북송의 도성 카이펑의 형성과 문화 창조 – 사회집단으로서의 군인과 도인 (都人) –

쿠보타 카즈오

당송간의 도성의 변용에 대해, 지금까지 여러 연구자들이 언급해왔으나 도시 주민을 사회 집단으로서 상정하고 그 변용으로서의 도성의 변용을 파악하는 시점은 없었다. 본 발표에서는 카이펑 (開封)에서 최초로 설치된 본격적인 외성곽・옹성 및 성호에 의해 처음으로 도성 주민이 방위의 대상이 된 점을 지적하면서 도성 주민과 황제 정부와의 관계가 변용했던 점을 들어, 새로운 도성 문화 창조의 배경을 고찰하겠다. 그것을 통해서 카이펑에서 생성된 도성문화가 후세에 어떻게 계승되어 왔는지를 제시하겠다.

Culture Creation and City Building at the Birth of the Northern Song Dynasty: City Residents and Soldiers as Social Groups

Kubota Kazuo

To this point, the castle city transformation between the Chinese Tang and Song dynasties has yet to be explored from the perspective of city residents as a social group. This report posits that through the construction of genuine castle fortresses and trenches at the start of the Song Dynasty, city dwellers were regarded as an object of defense for the first time, and explores the circumstances surrounding the new city culture produced by the changed relationship between residents and the Imperial government. Further, this report discusses how the city culture born at the opening of the Song was inherited by later generations.

【要旨】
元の大都における宗教空間
渡辺健哉（東北大学大学院文学研究科専門研究員）

　これまで報告者は元の大都がどのように形成されてきたのかについて、時間軸に沿った形で検討を行ってきた。大都は１３世紀にユーラシアのほぼ全域を統合したモンゴル帝国の首都としてクビライによって建設され、その後の明清時代も都であり続け、現在の中華人民共和国の首都である北京の原型である。
　本報告はこれまで報告者が行ってきた大都の生成過程の解明から都市内部の検討に踏み出す第一歩として、大都で宗教施設がどのような機能を有していたのかについて明らかにしていきたい。具体的には仏寺・道観を単に信仰の空間としてみるだけではなく、そこに人が集まることにより附加されていった役割や機能について考察する。加えて、大都が元朝の首都であるということから、宗教施設で行われた国家儀礼や皇室による絵画の展覧会についても触れていく。そのうえで、こうした宗教施設において生じたコミュニケーションについても言及を加えたい。

（要旨）
元大都的宗教空间
渡边健哉（东北大学大学院文学研究科专门研究员）

　到目前为止，发表者以时间为轴，厘清了有关元大都形成的问题。即，元大都，是在 13 世纪，被当时几乎统治全部欧亚地区的蒙古帝国之忽必烈作为首都而建造的，其后又相继成为明清王朝的首都，以及如今中华人民共和国首都的北京之原型。

　本次报告，是在以往厘清大都形成过程的基础上，开始涉及都市内部，试图弄清大都内宗教设施起到的作用。具体来所，不仅把佛寺和道馆当做单纯的信仰空间来解释，更是分析因由百姓辐辏而附加于这些宗教设施之上的具体机能。另外，因为大都是元朝首都，所以还会论及在这些宗教设施中举行的国家仪礼和皇室的绘画展览会。在此基础上，来管窥这些宗教设施所生成的交流网。

원(**元**) 다이두의 종교공간

와타나베 켄야 (도호쿠대학대학원 문학연구과 전문연구원)

지금까지 발표자는 원의 수도 다이두 (**大都**)가 어떻게 형성되어왔는지에 관해 주로 시간축에 따라 검토해 왔다. 다이두는 13 세기에 유라시아 거의 전역을 통합시킨 몽골 제국의 수도로서 쿠빌라이에 의해 건설되었다. 그 후 명청대에도 계속해서 수도로 존재하여, 현재 중화인민공화국 수도인 베이징 (**北京**)의 원형이다.

본 발표는 지금까지 발표자가 연구해 온 다이두의 생성 과정의 해명에서 도시 내부의 검토로 진입하는 제 1 보로서, 다이두에서 종교시설이 어떠한 기능을 가졌는지를 밝히고자 한다. 구체적으로는 불사・도관을 신앙의 공간으로만 여기는 것이 아니라 그곳에 사람들이 모이면서 부가된 역할 및 기능에 대해서 고찰할 것이다. 이에 더하여 다이두가 원조의 수도라는 점에서 종교시설에서 행한 국가의례 및 황실의 회화 전시회에 대해서도 소개할 것이다. 위 사항을 바탕으로 이러한 종교시설에서 발생한 커뮤니케이션에 대해서도 함께 언급할 것이다.

Religion in Dadu, the Yuan Dynasty Capital

Watanabe Kenya

To this point, researchers have examined the formation of Dadu, the Yuan Dynasty capital, using a time-based approach. Dadu was established by Kublai Khan in the thirteenth century as the capital of the Mongolian Empire, which comprised nearly all of Eurasia at the time; it continued to function as a metropolis in the subsequent Ming and Qing Dynasties, and is presently known as Beijing, the capital of the People's Republic of China.

By shifting the focus away from Dadu's formation process, I hope to take the first step toward internal investigation of the capital by clarifying the function and role of its religious institutions. Rather than looking at Buddhist and Taoist temples simply as places of worship, this report specifically discusses their additional function as places of congregation. As the capital of the Yuan Dynasty, the Imperial family's art exhibitions and national ceremonies were also held in Dadu's religious institutions. This report further explores the forms of communication which occurred in the capital's religious spheres.

日本の中世都市の構造―政治と文化・宗教―（要旨）

美川　圭

８世紀末に律令国家によって建設された平安京は、１０世紀になると天皇の御所である内裏はしばしば焼失し、再建の間、大内裏（官庁街）の外部に仮御所である里内裏が設けられた。天皇が里内裏に住むことが多くなると、大内裏内の官衙はしだいに衰退する。また、『池亭記』という記録には、右京（平安京西部）が衰退し、左京北部（平安京北東部）が発展、京外の鴨川周辺、北部京外に人家が進出したと記されている。平安京は律令国家の首都としては衰退しつつあったが、商業流通の拠点都市に自己変容しつつあった。それとともに、七条町といわれる左京南部の商工業地帯が発展したが、１１世紀末以降の院政期になると、大内裏から離れた左京南部の六条や八条に院御所や里内裏がつぎつぎ造営された。また、平安京の外部（鴨川の東岸）である白川地区に法勝寺をはじめとする天皇家の御願寺が建設され、南郊の鴨川と桂川の合流地点に鳥羽殿という巨大な院御所も造営された。同時期、宇治川河畔にも摂関家によって、新たな近郊都市が造られた。これらの白川地区、鳥羽殿、宇治などの近郊都市は、いずれも天皇の御願寺、鳥羽殿内の白河・鳥羽・近衛天皇陵と礼拝仏堂、宇治の平等院といった権門としての院、摂関家などにとっての重要な文化・宗教施設を中核とする構造をもっていた。平安京自己変容と近郊都市の出現によって、平安京は水陸交通を通じて近郊都市を包含しつつ大平安京、すなわち巨大な複合都市京都へと変化した。一方、この近郊都市を形成した文化・宗教施設を中核とする権門都市としての性格は、鶴岡八幡宮と若宮大路を中軸とした鎌倉、中尊寺などの奥州藤原氏の墓寺を中核とした平泉などに、より明瞭なかたちで出現する。日本の中世都市は、こうして文化・宗教施設を中核とする特質を持つことになった。

日本中世都市的构造：政治、文化和宗教

美川 圭

由律令国家在 8 世纪末建造的平安京，到了 10 世纪，其中天皇所居住的“内里”频频失火，于是，在重建之际，在大内里（官厅街）的外部建造了被称为“里内里”的临时居所。而伴随着天皇居住在里内里中的时间变多，导致了“大内里”中的“官衙”的逐渐衰退。另外，根据《池亭记》的记载，右京（平安京西部）在衰退的时候，左京北部（平安京东北部）得到了发展，并且在平安京外的鸭川周边以及平安京外北部地区出现了人口的流入。因此平安京作为律令国家的首都，虽然逐渐衰退，但是却慢慢蜕变成商业流通的据点城市。随之，被称为七条町的左京南部工商业地带得到了逐步发展，但是到了 11 世纪末以后的“院政”期，在远离“大内里”的左京南部的六条或是八条附近，“院御所”和“里内里”被接二连三的修筑起来。另外，属于平安京外部（鸭川的东岸）的白川地区，则修建起了以法胜寺为首的天皇家的“御愿寺”，在南郊的鸭川和桂川的合流地区，亦营造起了被称为鸟羽殿的巨大“院御所”。在此时期，摄关家也在宇治川河畔修建了新的近郊都市。这些白川地区、鸟羽殿、宇治等近郊都市，都具备一些对于禅让的天皇（即“院”）、“摄政、关白”家世等的权门来说的以宗教设施为核心的建筑构造，即如天皇的御愿寺，鸟羽殿里的白河、鸟羽、近卫天皇的陵墓和“礼拜佛堂”，宇治的平等院。伴随着平安京的自我蜕变以及近郊都市的出现，平安京由借由水陆交通沟通近郊都市变成大平安京，就是成为了巨大的复合型都市京都。而在另一方面，诸如以文化、宗教设施为核心的权门都市的特点，比起以鹤冈八幡宫和若宫大路为重要组成部分的镰仓，或是以中尊寺等奥州藤原氏的墓寺为重要组成部分的平泉等地方，显得更为鲜明突出。日本的中世都市，正是具备了这样的以文化、宗教设施为核心的特质。

일본 중세도시의 구조 - 정치와 문화・종교 -

미카와 케이

8 세기 말 율령국가에 의해 건설된 헤이안쿄 (平安京)는 10 세기 이후 천황의 거처인 다이리 (内裏: 대궐)가 종종 소실되어, 재건 중에 다이다이리 (大内裏: 官庁街, 대궐 구역) 외부에 임시 대궐인 사토다이리 (里内裏)가 설치되었다. 천황이 사토다이리에 거주하는 일이 잦아지면서 다이다이리의 관아는 점차 쇠퇴하게 되었다. 또한, 『치테이키(池亭記) 』라는 기록에는 우쿄 (右京: 헤이안쿄 서부)가 쇠퇴하고, 사쿄북부 (左京北部: 헤이안쿄 북동부)가 발전하여 교토 외곽의 카모가와 (鴨川) 강 주변, 교토의 북부외곽에 인가가 등장했다고 기록되어 있다. 헤이안쿄는 율령국가의 수도로서는 쇠퇴해 가고 있었지만 상업 유통의 거점도시로서 자기변용을 거듭하였다. 또한, 시찌죠마치 (七条町)라 불리는 사쿄 남부의 상공업지대가 발전했는데, 11 세기 말 이후의 원정기 (院政期) 이후 다이다이리에서 분리된 사쿄 남부의 로쿠죠 (六条) 와 하찌죠 (八条)에 인고쇼 (院御所) 및 사토다이리가 잇달아 조영되었다. 또한, 헤이안쿄의 외부 (카모가와의 동안)인 시라카와 (白川) 지구에 홋쇼지 (法勝寺)를 시작으로 하는 천황가의 고간지 (御願寺)가 건설되어, 남쪽 근교의 카모가와와 카츠라가와 (桂川) 강의 합류 지점에 토바도노 (鳥羽殿)라고 하는 거대한 인고쇼가 조영되었다. 같은 시기에 우지가와 (宇治川) 강변에도 셋칸 가문 (摂関家)에 의해 새로운 근교도시가 만들어졌다. 이러한 시라카와 지구, 토바도노, 우지 등의 근교도시는 모두 천황의 고간지, 토바도노 내의 시라카와 (白河)・토바 (鳥羽)・코노에 천왕릉 (近衛天皇陵)과 예배 불당, 우지의 뵤도인 (平等院) 등 권문으로서의 인 (院), 셋칸 가문 등에게 있어서 중요한 문화・종교시설을 중심으로 한 구조로 되어 있었다. 헤이안쿄의 자기변용과 근교 도시의 등장에 따라 헤이안쿄는 수륙 교통을 통하여 근교 도시를 포함해가면서 대 (大)헤이안쿄, 즉 거대한 복합도시 교토로 변화했다. 한편, 이 근교도시를 형성시킨 문화・종교시설을 중심으로 한 권문도시로서의 성격은 츠루오카하치만 궁 (鶴岡八幡宮)과 와카미야 대로 (若宮大路)를 주축으로 한 가마쿠라, 주손지 (中尊寺) 등의 오슈후지와라 씨 (奥州藤原氏)의 묘사 (墓寺)를 중심으로 한 히라이즈미(平泉) 등에 더 확실한 형태로 출현한다. 일본의 중세도시는 이러한 형태로 문화・종교시설을 중심으로 하는 특질을 가지게 된 것이다.

The structure of medieval cities in Japan: politics and culture/religion (Abstract)

Mikawa Kei

In the 8th century, under the *ritsurei* codes the Heiankyo was established. By the 10th century, the imperial palace was destroyed by fire from time to time and in the interim needed for reconstruction, emperor resided in a temporary palace (or *sato dairi*) established outside the great imperial palace (*dairi*). As the time spent by emperor in the *sato dairi* increased, government office in the great imperial palace declined. The Chiteiki records mention that the Ukyo (western part of the Heiankyo) declined, Sakyo (eastern part of the Heiankyo) developed, and the parts outside the capital around Kamogawa river and in the north were increasingly populated. Heiankyo was declined as a capital based ob *ritsurei* codes, but it was transforming into a center of trade and commerce. At the same time, a district of commerce and industry called Shichijo-cho and located in the southern part of Sakyo was developing, but since the rule of the retired emperors in the end of the 11th century, the *sato dairi* and palaces of the retired emperors started to concentrate in the Rokujo and Hachijo areas of the Sakyo. Moreover, on the outskirts of Heinakyo in the Shirakawa district (eastern bank of the Kamogawa river) were established temples for the imperial family starting with Hosshoji and in the south outskirts on the delta of Kamogawa and Katsura rivers, a huge palace fro retired emperor called Toba-dono was built. In the same period, a neighboring city was built on the banks of the river Uji by the regent and advisors families. The neighboring cities of Shirakawa, Toba, and Uji were are all serving as important cultural and religious centers for the regents, advisors and other families with establishments such as temples for imperial families, mausoleums and worship halls of the Toba, Shirakawa and Konoe emperors, or powerful temples as Byodoin in Uji. Due to the transformation of the Heiankyo and emergence of the neighboring cities, Heiankyo started to include the neighboring cities through water and ground routes into a greater Heiankyo, and transformed into large urban complex of Kyoto city. On the other hand, the cultural and religious establishment that formed the character of the important outskirt cities appeared in an even clearer way in the Tsurugaoka-hachimangu and Wakamiya-oji concentrated around Kamakura, Chusonji temple or grave temples of the Oshu-Fujiwara clan concentrated around Hiraizumi. In this way, the medieval Japanese cities were characterized by cultural and religious establishments.

社会集団からみる中世京都

仁木　宏（大阪市立大学）

12 世紀から 16 世紀を「中世京都」と考える。本報告では、中世京都における様々な社会集団をとりあげ、それぞれの特徴を解明することを通じて、中世都市京都の一側面を明らかにしたい。

中世前期以来の社会集団としては、まず公家・武家の家政機関をあげることができる。当主を中心に、一族・家臣らからなる集団で、家職の維持・発展のために結集していた。但し、この集団の外縁部に位置した中下層身分の人たちの中には、商人・職人であったり、寺社に仕える者であったりする側面をもつものもいた。

朝廷につかえる集団の内、中世において社会集団とよべるのは駕輿丁（かよちょう）、供御人（くごにん）などであろう。駕輿丁は、天皇の輿などをかつぐのが職務である下級役人であったが、中世には、役職にともなう税免除特権を求めて集まってきた商工業者が中心となっていた。供御人も本来は天皇に供御（食べ物をはじめとする物資）を献上する人々であったが、やはりそのことを特権の由来として生産・商業に携わっていた。

駕輿丁・供御人や、他の一般的・普遍的な座組織は、自分たちの独占権を守るため、武力を行使したり、幕府に訴訟したりした。「本所」（ほんじょ）とよばれる領主を戴き、自分たちのリーダーをもつ、一定度求心的な集団であった。ただ、本座・新座などの重層的構造をとる場合もあり、外縁部の構成員のなかには他の集団と両属するものもあった。

中世後期（15 世紀以降）になると、宗教集団や地縁的共同体があらわれてくる。法華宗集団は 1530 年代には一時、京都における行政執行を幕府に代わっておこなった。その後、強力に台頭した地縁的共同体は、16 世紀第 3 四半期には都市行政の下部を支えるまでになった。

中世都市京都における社会集団を通覧してみると、都市における人間関係の多くが社会集団によって規定されていることに気づく。さまざまな社会集団が多少の階層差をともないながらも、一部で重なりあいながら「団子状」に展開しているといえよう。これらの集団のもつ「開放性」は、16 世紀に発達する地縁的共同体がもつ「閉鎖性」と比較することから看取することができる。

从社会集团来看中世京都

仁木　宏（大阪市立大学）

我们将 12 世纪至 16 世纪的京都称为“中世京都”。本报告通过探讨中世京都的各种社会集团，弄清它们的各自特征，以阐明中世城市京都的一个侧面。

作为中世前期以来的社会集团，首先可以举出公家、武家的家政机构。为了家职的维持和发展，以户主为中心，由同族和家臣结集成一个集团。不过，位于该集团边缘的中下层身份的人之中，既有商人和工匠，也有效力于寺社的人。

中世，在效力朝廷的集团中，可以称之为社会集团的有驾舆丁（Kayocyo）、供御人（Kugonin）等。驾舆丁是为天皇抬轿的下层官吏，到了中世，变成了以工商业者为主，他们为的是谋求职务所带来的免税特权。供御人原本也是向天皇进献供御（食物等物资）的人，亦由于特权的缘故，参与了生产和商业。

驾舆丁、供御人以及其他普遍的一般性行会组织，为了维护自己的垄断权，或行使武力，或诉诸幕府。拥戴被称为“本所”（Honjyo）的领主，拥有自己的领袖，是具有一定向心力的集团。不过，也存在本座和新座等多重结构，在边缘成员中，也有人同时隶属于其他集团。

到了中世后期（15 世纪之后），出现了宗教集团和地缘共同体。法华宗集团在 1530 年代的一个时期，在京都代替幕府执掌行政。其后，迅猛抬头的地缘共同体，在 16 世纪后半叶，支撑着城市行政的下部。

综观中世城市京都的社会集团，我们发现城市中的很多人际关系都受到社会集团的制约。可以说，各种社会集团虽然多少存在着一些阶层差别，但一部分相互重叠，呈现“丸子串形状”。这些集团所具有的“开放性”，可以与发展于 16 世纪的地缘共同体所具有的“封闭性”进行比较之后看出。

사회집단으로 본 중세 교토

니키 히로시 (오사카시립대학)

12 세기에서 16 세기를「중세 교토」라고 할 수 있다. 본 발표에서는 중세 교토의 다양한 사회집단에 초점을 두고 각각의 특징을 해명하는 것을 통해 중세 도시 교토의 한 측면을 제시하려고 한다.

중세 전기 이래의 사회집단으로서 먼저 공가 (公家) ・ 무가 (武家)의 가정(家政)기관을 들 수 있다. 당주를 중심으로 일족・가신들로 이루어진 집단으로, 가업의 유지 ・ 발전을 위해 결집했다. 하지만, 이 집단의 외연부에 위치한 중하층 신분의 사람들 중에는 상인・직인이거나 절과 신사에 봉사하는 사람도 있었다.

조정에 봉사하는 집단 중에, 중세에 사회집단이라고 부를 수 있는 것은 카요쵸(駕輿丁), 쿠고닌 (供御人)등일 것이다. 카요쵸는 천황의 가마 등을 메는 것이 직무인 하급 역인이었는데, 중세에는 직무에 부과되는 세금 면제 특권을 노리고 모여든 상공업자가 중심이 되었다. 쿠고닌 역시 원래는 천황에게 진상 (음식 등의 물자)하는 사람들이었으나, 이 역시 그것을 특권으로 삼아 생산・상업에 종사하였다.

카요쵸・쿠고닌과 다른 일반적・보편적 자 (座) 조직은 자신들의 독점권을 지키기 위해 무력을 행사하거나 막부에 소송하기도 했다. 「혼죠 (本所)」라 불리는 영주를 두어 자신들의 리더를 갖는, 어느 정도 구심적인 집단이었다. 하지만 혼자 (本座)・신자 (新座)등의 중층적 구조를 갖는경우도 있어서 외연부의 구성원 중에는 다른 집단과 양 쪽 모두에 속하는 사람도 있었다.

중세 후기 (15 세기 이후)가 되면 종교 집단과 지연적 공동체가 나타나게 된다. 법화종 (法華宗) 집단은 1530 년대에는 일시적으로 막부를 대신하여 교토의 행정집행을 맡았다. 그 후 강력하게 대두한 지연적 공동체는 16 세기 제 3 사반기에는 도시 행정의 하부를 지탱하기에 이르렀다.

중세 도시 교토의 사회집단을 종합적으로 살펴보면, 도시의 인간관계의 다수가 사회집단에 의해 규정되어 있었던 것을 알 수 있다. 다양한 사회집단들이 다수의 계층차를 가지면서도 일부에서 서로 중첩되면서 경단꽂이 모양으로 전개되어 있었다고 할 수 있다. 이들 집단이 가지는「개방성」은 16 세기에 발달하는 지연적 공동체가 가지는「폐쇄성」과 비교하면 더 뚜렷하게 파악할 수 있다.

Medieval Kyoto viewed through social groups

Niki Hiroshi (Osaka City University)

We consider the period from 12th to 16th century to be “medieval Kyoto”. In this paper, we focus on various social groups and, by making clear their peculiar features, we aim to clarify one aspect of the medieval city of Kyoto.

Firstly, we can distinguish housekeeper institutions of court noble and samurai class as a social group of pre-early period of medieval times. It was a group that had the head of the family in the center and consisted of a family and vassals, being formed with the aim of maintenance and development of profession of that house. However, among some of the people of lower social status who were located in the outskirts of this group, there were also merchants, craftsmen, and people who served in temples and shrines.

Among the people who served in the Imperial Court, those who in middle ages could have been called social groups were Kayocho (palankin bearers) and Kugonin (purveyors to the imperial household) etc. Kayocho were junior officers whose duty was to carry palanquin of the emperor, but in the Middle Ages they consisted mainly of merchants who have gathered to seek tax exemption privileges associated with this position. Kugonin originally were also people who provided for the emperor’s table (goods, including food), but they also started being involved in the production and trade as the privilege rooted in performing such functions.

In order to protect the exclusive rights of their own, Kayocho and Kugonin, as well as other common and universal organizations, were using military power and sometimes brought an action against shogunate. They were to some extent centripetal organizations that received a sovereign called Honjo and had a leader of their own. However, in some cases they had a multilayered structure, such as Honza (“old seats”) and Niiza (“new seats”), and among the members in the outer parts there were those who belonged to other groups at the same time.

In the late Middle Ages (15th century or later), religious groups and communities with shared territorial ties begin to appear. There was period in Kyoto of 1530s when the Nichiren sect of Buddhism performed administrative functions instead of the shogunate. After that, communities with shared territorial ties emerged strongly and supported the basis of the city administration during the third quarter of the 16th century.

If we take a look at social groups in medieval Kyoto, we will understand that many of human relations in the city are regulated by social groups. It can be said that various social groups, though they had some differences in hierarchy, were developing by overlapping over each other in some parts in a "dumpling-like" style. The “openness” characteristic for such groups may be recognized by comparing it with “closedness” possessed by communities with shared territorial ties.

16 世紀以来の長江三角州地区経済社会の統合と発展

唐力行

内容要旨：今日の中国大陸で、長江三角州地区は疑いなく経済・社会・文化が最も発達した区域のひとつであり、行政区画上では分かれて江蘇・浙江・上海・安徽の四つの異なる省区に属すると言っても、しかし歴史的に見れば、その内部の各小区域間で有機的に結びつくことや互いと統合することが早くに存在した。特に 16 世紀以来、世界市場の興隆、海外貿易の発展につれて、この区域の経済社会の統合の歩みを大いに速め、その内に対する統合と外に対する開放は数段階の曲折を経て、最終的に今日の長江三角州特有の地理的特徴と優位を形成した。その淵源にさかのぼると、今日の長江三角州の形成と発展は実に自然な歴史過程であり、この歴史変遷の過程およびその背後の原因を顧みることは、疑いなく行政区画の人為的分割をさらに乗り越え、まことに上海を中心とした長江三角州経済社会の全面的統合を実現する、たいへん意義のあるものである。

キーワード：長江三角州　区域　経済社会　文化　統合

作者所属：上海師範大学中国近代社会研究センター

16 世纪以来长三角地区经济社会的整合与发展

唐力行

内容提要：在今天的中国大陆，长江三角洲地区无疑是经济、社会、文化最为发达的区域之一，它在行政区划上虽然分属于江浙沪皖四个不同的省区，但历史地看，其内部各个小区域间有机联系与相互整合却早已存在。特别是自 16 世纪以来，随着世界市场的兴起，海外贸易的发展，使得这一区域经济社会整合的步伐大大加快，其对内的整合与对外的开放经历了数个阶段的波折，最终形成了今天长三角特有的区位特点和优势。追溯其渊源，今天长三角的形成与发展实在是一个自然的历史过程，而回溯这一历史演变的过程及其背后的原因，无疑对于进一步突破行政区划的人为分割，真正实现以上海为中心的长三角经济社会的全面整合，是十分有意义的。

关键词：长三角　区域　经济社会　文化　整合

作者单位：上海师范大学中国近代社会研究中心

16 세기 이후 창장 삼각주 지구 경제사회의 통합과 발전

탕 리싱（唐力行）

요지: 오늘날 중국 대륙에서 창장싼자오저우 (長江三角州: 이하 창장 삼각주라고 표기)지구는 의심할 여지 없이 경제・사회・문화가 가장 발달된 구역 중 하나이며, 행정 구획상으로는 각각 장쑤(江蘇) ・ 저장(浙江) ・ 샹하이(上海) ・ 안후이(安徽) 4 성의 4 구역으로 나뉘어져 있다. 하지만 역사적으로 살펴보면 그 내부의 각 소구역들 간이 유기적으로 결합되어 있거나 서로 통합되는 현상이 일찍부터 존재했다. 특히 16 세기 이래 세계 시장의 융성으로 해외 무역이 발전함에 따라 구역 간의 경제 사회 통합이 빠르게 진전되기 시작하여, 내부에 대한 통합과 외부에 대한 개방이 여러 단계의 곡절을 거쳐 최종적으로 현재의 창장삼각주 특유의 지리적 특징 및 우위를 형성했다. 그 심연을 거슬러 올라가면, 오늘날의 창장삼각주의 형성과 발전은 실로 자연적인 역사 과정이라 할 수 있다. 그 변천 과정 및 배후의 원인을 들여다보는 것은 행정구획의 인위적인 분할을 뛰어넘는, 샹하이 (上海)를 중심으로 한 창장삼각주 경제 사회의 전면적인 통합을 실현하는 매우 의의가 있는 일이다.

키워드: 창장 삼각주 구역, 경제 사회, 문화, 통합

소속: 상해사범대학 중국근대사회연구센터

Development and integration of socio-economics after the 16th century Yangtze River Delta

Tang Lixing

The Yangtze River delta is one of the most socially, economically and culturally developed area in mainland China today. Historically, organic connections and integration within Yangtze River delta between each small district was observed at an early stage although it goes across four different provinces: Jiangsu, Zhejiang, Shanghai and Anhui.

The prosperity of the global market and the development in foreign commerce accelerated the integration of socio-economics in this district especially after the 16th century. This gradual internal integration and an open door policy ultimately lead to the forming of geographical characteristics and the ascendancy of Yangtze River delta today. It is clear that the formation and the development of Yangtze River delta today is certainly the result of the natural historical process. Deliberating the process of these historical changes and the causes behind them will be highly significant in realizing integration of socio-economics in the Yangtze River delta centered upon Shanghai and understanding the need to overcome the administrative divisions.

15 世紀朝鮮における＜儒＞の位相――『慵斎叢話』の世界から（要旨）

野崎　充彦

成俔（1439～1504 年）の『慵斎叢話』は朝鮮稗官文学の白眉と称され、簡潔な文章の美しさのみならず、そこに含まれる 320 にのぼる長短さまざまな話題の幅広さでも他の追随を許さない。それは世俗社会から潮の満ち引きのような自然現象、はたまた鬼神世界にまでと、およそ森羅万象にわたり、殆ど事物起源的な趣さえ持つ。

また、成俔自身が勲旧派と呼ばれる保守的な家門の出身であり、長く官界に身を置いたこともあって、内側から見た士大夫世界の日常描写は特に生彩を帯びている。たとえば、司憲府や弘文館で行われていた「新人いじめ」の風習がそうである。これは科挙及第して得意の極みにある新人の気勢を挫くために行われたという。

また、その人物評は歴史上の著名な人物から身近な友人まで多種多様だが、例えば「朝鮮文学の祖」として名高い崔致遠に対する厳しい評価のように、なかには現代の評価とは異なるものも少なくないが、ここでは特に「儒」に関する言説を取り上げたい。なぜなら、前期朝鮮社会における「儒」のあり方こそはいわゆる儒教社会の形成過程を理解するうえで大きな手掛かりを与えてくれるからである。

例えば、世祖簒奪と呼ばれる宮廷クーデターによって政権を掌握した世祖の儒者に対する態度には著しい特徴があり、それを一言でいえば、「俗儒」への批判と「通儒」への志向である。前者は愧じもせず曲学阿世をこととする丘従直と、それに反発する愚直なまでに原理主義的な鄭自英の対立に対する世祖のシニカルな態度に見られよう。後者は経世済民のために実用の学を幅広く活用しようとする申叔舟と、それとは対照的に士大夫のなすべき学を狭く規定しようとする金宗直に対する世祖の態度に明確に表れている。

このような「儒」のあり方は文学観にも及び、朝鮮伝奇小説の発展にも寄与することとなった。それはまた、林羅山のような徳川初期の儒者にも通じるところがあり、比較文化的にも興味深いものである。

15 世纪朝鲜的〈儒〉的定位――通过《慵斋丛话》的世界来看

野崎 充彦

成俔（1439～1504 年）的《慵斋丛话》被誉为是朝鲜稗官文学的杰作，不仅文章简洁，更是包含着 320 个以上长短不等的主题，让其他著作望尘莫及。而且，其中内容包罗万象，从世俗生活到潮起潮落等自然现象，再到鬼神世界，囊括着对事物起源的有趣探索。

另外，成俔本人就是出生于被成为勋旧派的保守世家，他长期置身官场，所以可以从内部观察士大夫的世界，给予其日常生活以精彩生动的描写。比如说，书中说，司宪府或是弘文馆有着“欺负新人”的习惯。据说这是为了挫一挫刚刚科举及第的新人的锐气。

还有，其中臧否的人物多种多样，不仅涉及历史上的著名人物，更是包括身边的友人。比如说，像是对被称为“朝鲜文学之祖”的崔致远给予了严厉的评价那样，成俔有不少和现代评价不同的看法，在此，本人主要想特别列举其中关于〈儒〉应具有的状态的言论。因为，理解前期朝鲜社会的〈儒〉的状态，可以极大的帮助了解儒教社会的形成过程。

例如，通过宫廷政变而篡位夺权的世祖对于儒者的态度是非常有特点的，简言之，即是批判〈俗儒〉和支持〈通儒〉。批判〈俗儒〉，最能表现在世祖对于不顾廉耻、曲学阿世的丘从直，和近乎愚直的批判丘氏的基于原理主义的郑自英持有的对立态度，是讥讽的。支持〈通儒〉，主要表现在世祖对于申叔舟为了经世济民而提倡广泛利用实用之学，以及对与此相反的金宗直认为必须严格规定士大夫的应尽之道的态度上。

像这样的〈儒〉的理想状态也影响到了文学观，对朝鲜传奇小说的发展做出了贡献。在这点上，又和林罗山这样的德川初期的儒者有共通之处，在朝日文化的比较上着实非常耐人寻味。

15 세기 조선의 <유>의 위상 -『용재총화』의 세계로부터 -

노자키 미츠히코

성현 (成俔, 1439～1504 년)의 『용재총화(慵斎叢話)』는 조선 패관문학의 백미로 칭해진다. 간결한 문장의 아름다움뿐만 아니라 문장에 담긴 320 여 개에 이르는 길고 짧은 화제의 폭넓음 또한 타의 추종을 불허한다. 그 범위는 세속 사회에서 밀물썰물과 같은 자연 현상, 또는 귀신 세계에까지 대략 삼라만상에 걸쳐 있으며, 거의가 사물기원적인 분위기가 감돈다.

또한, 성현 자신이 훈구파라 불리는 보수적인 가문 출신으로 관직에 오랫동안 종사했었기 때문에 내부에서 본 사대부 세계의 일상 묘사는 특히 선명한 색채를 띠고 있다. 예를 들면, 사헌부나 홍문관에 존재했던「신참례(新參禮)」의 풍습이 그것이다. 이는 과거에서 급제하여 득의양양한 신입의 기세를 꺾기 위해 행해졌다고 한다.

또한, 그 인물평은 역사상 유명한 인물에서부터 가까운 친구까지 다양한데, 예를 들면「조선 문학의 시조」로서 이름 높은 최치원에 대한 박한 평가처럼 개중에는 현대의 평가와는 다른 것도 적지 않으나, 여기에서는 특히「유 (儒) 」에 관한 담론에 주목하려고 한다. 왜냐하면 전기 조선 사회에서의「유」의 모습이야 말로 유교 사회의 형성 과정을 이해하기 위한 중요한 단서를 제공해주기 때문이다.

예를 들어, 세조찬탈에 의해 정권을 장악한 세조의 유학자에 관한 태도에는 눈에 띄는 특징이 있는데, 그것을 한 마디로 말하면「속유(俗儒) 」비판과 「통유 (通儒) 」지향이다. 전자는 염치없이 곡학아세를 일삼는 구종직 (丘從直)과 그에 반발하는 우직할 정도로 원리주의적인 정자영 (鄭自英)의 대립에 대한 세조의 시니컬한 태도에서 볼 수 있다. 후자는 경세제민을 위해 실용 학문을 폭넓게 활용하고자 하는 신숙주(申叔舟)와 그와는 대조적으로 사대부가 추구해야 할 학문을 협소하게 규정하려고 하는 김종직 (金宗直)에 대한 세조의 태도에서 명확하게 나타나있다.

이러한「유」의 모습은 문학관에도 영향을 미쳐, 조선 전기소설의 발전에도 기여하게 되었다. 이는 또한 하야시 라잔 (林羅山)과 같은 도쿠가와 (徳川) 초기의 유학자와도 통하는 부분이 있어, 비교문화적으로도 흥미 깊은 것이다.

Position of the Confucianism in the 15th century Korea: from the world of the 慵斎叢話 (Abstract)

Nozaki Mitsuhiko

Son Hyon's (1439-1504) 慵斎叢話 is regarded to be one of the best examples of the Korean novel literature. It outclasses many other works not only in terms of its pure and splendid style, but also by the extent of the topics covered by almost 320 shorter and longer works included in it. It covers the whole universe; from common society, natural phenomena such as rise and fall of the tides, or the world of gods and depicts it with extraordinary elegance.

Moreover, Son Hyon comes from a family belonging to a conservative sect called Fun-gyu and served in the government for a long time. His insider's descriptions of everyday world of the bureaucrats (*shitaifu*) are especially vivid. One such example is the custom of "newcomer bullying" in Saheonbu or Hong-moun-kwan. It said, that this was done in order to disrupt the enthusiasm of novices to pass the examination what was their utmost pride.

Furthermore, Hyon evaluated various people ranging from important historical figures to close friends. For example, as in the harsh critique of the Choe Chiwon known as father of the Korean literature, there are many ones that are different from modern evaluations, but here I focus especially on the discourse of the Confucianism. Focusing on the normative perceptions of Confucianism in the pre-modern Korea can bring us some significant clues on how to understand the process of construction of the so-called Confucian society.

For example, in a coup d'état called Se Jo usurpation, there is a very specific characteristic in Se Jo's (who came into power) attitude towards Confucianists. To put it simply, it was a critical stance towards a mediocre scholar (*zokuju*) and orientation towards hard working scholars (*tsuju*). The former can be seen in Se Jo's cynical attitude towards the opposition between timeserving scholar Ku Jong Jik, and Jeong Ja Yeong opposing him with even simply honest fundamentalism. The latter is obvious from the Se Jo's attitude towards Sin Suk Ju who endeavored to put to use the scholarship widely in order to achieve enlightened rule and succor of the people, and towards Kim Jong Jik who in contrast attempted to narrowly define the scholarship needed for the bureaucrats (*shitaifu*).

Such views on Confucianism are represented in the literature as well and helped in the development of the Korean romantic literature. This can be applied to, for example, an early Tokugawa Confucian scholar Hayashi Razan and is interesting from the perspective of comparative culture studies as well.

都市大坂と芸能文化　―浄瑠璃・祭礼など（要旨）

神田由築

日本近世の芸能文化の特徴の一つとして、地域的な独自性よりも全国的な共通性が強い点があげられる。たとえば、「絵本太功記＜えほんたいこうき＞」や「義経千本桜＜よしつねせんぼんざくら＞」などの作品（歌舞伎でも人形浄瑠璃でも演じられた）は、全国的に人気を得て、繰り返し上演された。しかし、より詳細にみれば、上演作品には共通性がみられる一方で、芸能文化の浸透や発現のかたちには、地域的な特色がないわけではない。そこで本報告では、大坂の都市文化の特色を、「素人＜しろうと＞」および社会的結合という観点から考察してみたい。

第一に、文化の担い手としての「素人」を紹介する。大坂では、たとえば浄瑠璃（義太夫節）を語る「素人」の「組」や、歌舞伎の舞台における手打＜てうち＞（パフォーマンスの一種）を仕切る「手打連中」など、たんなる観客として芸能を楽しむだけでなく、みずからが舞台にあがって芸を披露するような、ある特定の者たちが特徴的にみられた。とくに素人浄瑠璃の流行は、関連書の出版を促し、それがまた浄瑠璃人気を煽るなど、文化の再生産の原動力となった。

第二に、「素人」とは何か。そのことを社会的結合という観点から考えてみたい。「組」や「手打連中」が急速に成長したのは十八世紀後半ごろからで、その背景として、都市社会の成熟がさまざまな社会的結合を生み出し、それが「組」や「連中」の母体となったことが考えられる。また、こうした社会的結合は芸能の担い手にとどまらず、十九世紀の大坂で盛んに行われた祭礼や砂持＜すなもち＞（もともとは砂を運ぶ行為だが、やがて造り物や揃いの衣裳をともなうなど、祭礼のような派手さを加えた）などを支えることにもなった。

都市大坂和表演文化－净琉璃、祭礼等

神田 由筑

日本近世表演文化中的特征之一，是其中蕴含的全国共通性比地区个性来的显著。比如说〈绘本太功记（えほんだいこうき）〉或者是〈义经千本樱（よしつねせんぼんざくら）〉等作品（在歌舞伎和净琉璃中都有表演），就是在全国范围中博得了好评，被反复上演的。但是，如果我们细细观察的话，可以发现这些上演的作品，即使拥有全国共通的特色，也不代表在表演文化的渗透和发掘之中，不具备地区上的特色。因而，本次报告希望藉由从“素人（しろうと）”以及社会结合这两个角度，来重新审视大坂的都市文化特色。

首先，先介绍发展表演文化的中坚角色“素人”。在大坂，比如说有担任净琉璃（义太夫节）说唱的“素人”的“组”，或者是担任歌舞伎表演中拍手〈てうち〉（一种特定的表演方式）角色的“手打连中”等等，人们不仅作为观众享受表演的乐趣，更可以亲自登上舞台，参与其中，这种参与其中一特定角色的特征是很明显的。特别是素人净瑠璃的流行，促进了相关书籍的出版，这更是点燃了人们对净琉璃的热情，成为了文化再生产的原动力。

其次，是有关何为“素人”的问题。本人想从社会结合的角度来予以分析。从十八世纪后半期，像是“组”或是“手打连中”开始快速发展，我们可以认为，正是都市社会的成熟造就出的诸多社会结合成为了“组”或是“连中”形成的基础。另外，这种社会结合不止成为了发展表演艺术的中坚角色，在十九世纪，更是成为了盛行于大坂的祭礼或是砂持（すなもち）（原本仅指搬运砂子的行为，但是之后演变为持有小道具，并且身穿统一服饰等，具备了如祭礼一般的华丽装饰）的支柱。

도시 오사카와 예능문화 - 조루리・사이레이 등 -

칸다 유츠키

일본 근세 예능문화의 특징 중 하나로, 지역적 독자성보다 전국적 공통성이 높다는 점을 들 수 있다. 예를 들면「에혼 타이코키 (絵本太功記) 」나 「요시츠네 센본자쿠라 (義経千本桜) 」등의 작품 (가부키에서도 닝교조루리에서도 무대에 오른)은 전국적으로 인기를 끌어 계속해서 상연되었다. 하지만 좀 더 자세하게 살펴보면, 상연 작품에서는 공통성이 보여지는 한편, 예능문화의 침투와 발현의 모습은 지역적인 특성이 없을 수 없다. 그 점에 착안하여 본 발표에서는 오사카 도시문화의 특색을, 「시로우또 (素人) 」와 지역적 결합이라는 관점에서 고찰하려고 한다.

먼저, 문화의 실천자로서「시로우또」를 소개하겠다. 오사카에서는 예를 들면 조루리 (기다유부시〈義太夫節〉)의 화자인「시로우또」의「쿠미(組)」나, 가부키 무대에서 테우치 (手打: 퍼포먼스의 일종)를 이끄는「테우치렌츄 (手打連中)」등, 관객으로서 예능을 즐기는 것뿐만 아니라 스스로 무대에 올라가서 연기를 보여주는 특정한 사람들이 특징적으로 나타났다. 특히 시로우또 조루리의 유행은 관련 서적의 출판을 활발하게 하여 그것이 다시 조루리의 인기를 부채질하는 등, 문화의 재생산의 원동력이 되었다.

다음으로, 「시로우또」란 무엇인가에 관해서 사회적 결합이라는 관점에서부터 고찰하고자 한다. 「쿠미」와「테우치렌츄」가 급속하게 성장한 것은 18 세기 후반무렵부터인데, 그 배경으로 도시사회의 성숙이 다양한 사회적 결합을 낳아 그것이「쿠미」와「테우치렌츄」의 모체가 된 것으로 생각된다. 또한 이러한 사회적 결합은 예능 관계자 뿐만 아니라 19 세기 오사카에서 활발하게 행했던 사이레이(祭礼)와 스나모찌 (砂持: 원래는 모래_砂를 나르는 행위인데 점차 도구 및 의상을 곁들이는 등 사이레이와 같은 화려함이 더해졌다)등을 지탱하는 기반이 되었다.

City of Osaka and entertainment culture: *Joruri*, festivals and others (Abstract)

Kanda Yutsuki

One of the characteristics of the modern Japanese entertainment culture lies in the national commonality rather than regional differences. For example, works (that were performed in kabuki and *joruri*) such as "*Ehon taikoki*" or "*Yoshitsune senbonzakura*", are popular nationwide and were repeatedly performed. However, under a more particular scrutiny, whereas there are commonalities in the performed works, it does not necessarily imply that there are no regional differences in the penetration and expressions of the entertainment culture. In this paper, I aim to analyze the city culture of Osaka from the perspective of laymen (*shiroto*) and social cohesion.

First of all, I introduce the role of laymen as a bearer of culture. One of the characteristics seen in Osaka are specific people such as a group of laymen (*kumi*) narrating *joruri* (*Gitayu-bushi*), or a group (*teuchi renchu*) leading *teuchi* performance on the kabuki stage, who do not enjoy the entertainment only as audience, but become a part of the stage and perform the art themselves. Moreover, the popularity of laymen *joruri* stimulates publication of related literature, and this in turn stirs up the popularity of *joruri* and becomes a driving force of reproduction of culture.

Secondly, what is a laymen? I approach this question from the perspective of social cohesion. Groups such as *kumi* or *teuchi renchu* started to increase sharply in the mid-18th century. It can be argued that the maturity of the urban society formed the bases for the growth of *kumi* or *renchu*. Furthermore, such social cohesion became not only bearer of the entertainment, but sustained popular events in 19th century Osaka such as festivals or *sunamochi* (formerly an act of carrying sand which ultimately earned flamboyant character of festivals with decorations or common costumes) as well.

聴衆から見た電化教育――ラジオドラマを中心に――

（大阪市立大学）松浦恆雄

（要旨）

19 世紀末に中国社会に現われた映画や、1920 年代末から 30 年代にかけて登場したラジオ放送は、既存の出版・演劇などのメディアを遥かにしのぐ可能性を孕む、新しい娯楽／教育メディアとして注目を集めた。中華民国政府は、1936 年以降、これらの新興メディアを利用した教育に対して、電化教育という用語を用い本格的に取り組みだした。本稿では、電化教育のうちラジオ放送を用いた社会教育を取りあげる。

国営の中央放送局は、1932 年に開局するが、当初は魅力に乏しい番組編成で、民営のラジオ放送局に太刀打ちできなかった。しかし、1934 年に週刊のラジオ番組雑誌『広播週報』を創刊し、1935 年から番組編成を一新すると、一躍、視聴者の関心が高まった。特にラジオドラマは、当時の視聴者には、全く未知の娯楽（演劇）／教育体験であったため、人気が高かった。

中華民国政府は、ラジオ事業に本格的に取り組みむと同時に、全国各地のラジオ局（1937 年段階で 80 局）が製作するラジオ番組の規制にも乗り出した。また、1936 年の「各省市実施放送教育弁法」により各地に「放送教育服務処」を設けることを定め、一部の省では、中学校や民衆教育館にラジオ受信機を設置するなど、ラジオ放送による社会教育の体制整備も進んだ。

本稿では、このように全国的規模で進められたラジオ放送による社会教育の実像を、国営の中央放送局のラジオ番組の編成、内容から明らかにするとともに、特に 1935 年以降多彩になったラジオ番組や人気の高かったラジオドラマと視聴者との相互影響関係を、主に『広播週報』の記事から分析することにより、ラジオ放送というメディアが社会教育において果たした役割やその特色を明らかにしたい。

听众眼中的电化教育——以广播剧为中心

（大阪市立大学）松浦恒雄

（提要）

19 世纪末出现于中国社会的电影以及 1920 年代末至 30 年代出现的广播，孕育出大大超越出版和戏剧等已有媒体的可能性，作为新型的娱乐和教育媒体备受关注。中华民国政府在 1936 年之后，使用电化教育一词，正式开始实施利用这些新兴媒体的教育。本文探讨的是电化教育中利用广播的社会教育。

国营的中央广播电台创立于 1932 年，由于当初的节目缺乏魅力，竞争不过民营的广播电台。但是，随着 1934 年广播节目杂志《广播周报》的创刊，1935 年起对节目编排的革新，一举提高了听众的兴趣。尤其是广播剧，对于当时的听众来说，完全是陌生的娱乐（戏剧）和教育体验，因而颇受欢迎。

中华民国政府在正式实施广播事业的同时，着手对全国各地广播电台（1937 年阶段有 80 家）制作的广播节目进行管制。此外，根据《各省市实施播音教育办法》，1936 年规定在各地设置“播音教育服务处”，一部分省份在中等学校和民众教育馆安设收音机等，借助广播进行社会教育的体制也得到进一步完善。

本文着眼于国营中央广播电台的节目编排和内容，来阐明在全国范围内推进的借助广播进行社会教育的真实情况；与此同时，尤其是对 1935 年以后变得丰富多彩的广播节目、深受欢迎的广播剧和听众的相互影响关系，以《广播周报》的文章为主要资料进行分析，试图由此阐明广播这一媒体在社会教育中所发挥的作用及其特色。

시청자로부터 본 전화교육 – 라디오드라마를 중심으로 –

마츠우라 츠네오 (오사카시립대학)

19 세기 말 중국사회에 출현한 영화와, 1920 년대 말부터 30 년대에 걸쳐 등장한 라디오 방송은 기존의 출판·연극 등의 미디어를 훨씬 뛰어넘는 가능성을 품은, 새로운 오락/교육 미디어로 주목을 모았다. 중화민국 정부는 1936 년 이후, 이들 신흥 미디어를 이용한 교육에 전화교육_電化教育이라는 용어를 사용하여 본격적으로 뛰어들었다. 본고에서는 전화교육 중에서도 라디오 방송을 이용한 사회 교육에 주목할 것이다.

국영 중앙방송국은 1932 년에 개국했는데 당초에는 매력적인 요소가 없는 편성 탓에 민영 라디오 방송국과 맞대결이 불가능했다. 하지만 1934 년 주간 라디오 방송 잡지 『코하슈호 (広播週報)』를 창간하여 1935 년부터 방송 편성을 개편하자, 일약 청취자의 관심이 높아졌다. 특히 라디오드라마는 당시 시청자에게는 전혀 알려지지 않은 오락 (연극)/교육 체험이었기 때문에 인기가 높았다.

중화민국 정부는 라디오 사업에 본격적으로 뛰어듦과 동시에 전국 각지의 라디오국 (1937 년 단계에 80 국)이 제작하는 라디오 방송의 규제도 시작했다. 또한, 1936 년의「각 성시 실시 방송 교육변법_各省市実施放送教育弁法」에 따라 각지에「방송교육복무처_放送教育服務処」를 설치할 것을 결정하여 일부 성에서는 중학교와 민중교육관에 라디오 수신기를 설치하는 등, 라디오 방송에 의한 사회 교육 체제 정비가 추진되었다.

본고에서는 이와 같이 전국적 규모로 추진되었던 라디오 방송에 의한 사회 교육의 실상을 국영 중앙방송국의 라디오 방송 편성, 내용으로부터 제시할 것이다. 그와 함께, 특히 1935 년 이후 다채로워진 라디오 방송 및 인기가 높았던 라디오드라마와 시청자 간의 상호 영향 관계를, 주로 『코하슈호 (広播週報)』의 기사로부터 분석하여 라디오 방송이라는 미디어가 사회 교육에 있어서 발휘한 역할 및 그 특색을 밝히려고 한다.

Electrifying education from the point of view of audiences: focusing on radio plays

Matsuura Tsuneo (Osaka City University)

(Abstract)

Films that appeared in China in the end of 19th century, as well as radio broadcast that started in the end of 1920s-1930s, gathered attention as a new entertainment/education media that possessed a hidden potential to easily surpass the already existing media such as publishing industry, theater etc. The government of Republic of China after 1936 used the term “electrifying education” when referring to education that used these emerging media and seriously engaged in their development. In this paper, we will focus on social education that, among all media of electrifying education, used radio broadcast.

The government-managed central broadcast station started broadcasting in 1932, but the selection of the programs at that time was quite poor and it could not compete with private broadcast stations. However, after the weekly radio program journal “Guang bo zhou bao” was established in 1934 and the program selection was refreshed starting from 1935, the interests of the audience have suddenly increased. Radio dramas in particular were a completely unknown entertainment (theater)/education experience for audiences of that time, and gained much popularity.

The government of Republic of China, along with engaging seriously in radio industry, also started to regulate the radio programs created at radio stations across the country (80 stations as of 1937). Moreover, with acception of “law for implementation of broadcast education in all cities and provinces” in 1936, it decided to set up “places of broadcast education service” in various regions, and in some provinces the structural consolidation of social education through radio broadcast was promoted by means of setting up radio receivers at junior high schools and public education halls etc.

In this paper, based on program selection and program contents of radio programs at government-managed central broadcast station, we will shed light on the real image of social education through radio broadcast that has been promoted in the way described above on a national scale. At the same time, by analyzing the mutual influence relations of radio programs that became diversified especially after 1935 and radio dramas that gained much popularity on one hand, and audiences – on the other, based on the articles from “Guang bo zhou bao”, we would like to make clear the role that such media as radio broadcast has played as well as its characteristics in social education.

都市の音——近代上海マスメディアにおける蘇州評弾

洪　煜

要　旨

清末以来、蘇州評弾が上海へ流入し、発達・繁栄した近代マスメディアである情報ツールに刺激され、評弾芸術は新たな発展の時期を迎える。この評弾は上海の繁栄と近代上海で発達したマスメディアと密接な関係があった。近代マスメディアは時空的な限界があった伝統的な情報伝達の手段を超えて、さらに聴取者の範囲を広めていった。上海の近代化過程、都市の商業経済の高度な発展にともない、マスメディアも次第に商業化され、マスメディア発展の文脈において、蘇州評弾は資本主義の消費の表号となり、評弾文化は商店が自身の商品を宣伝する道具、芸術のツールとなっていった。近代マスメディアの発展と更新、とりわけラジオ放送の発展につれて、評弾の曲目の種類も新たな発展をとげ、評弾芸術の発展を推し進めた。同時に、近代マスメディアの進展により、知識人も自身の利益を得ようとの願いから、積極的に評弾の編集や創作に参加していく中で、評弾芸術の風雅さが高められていった。近代マスメディア、特にラジオ放送の普及にともない、評弾芸術は上海市民の日常生活の重要な娯楽と消費対象となり、評弾を聞くことは市民大衆のある種の日常生活の様式となっていく。評弾で使われる三弦の音色は近代上海の街の BGM となったのである。

［キーワード］近代上海マスメディア・蘇州評弾・ラジオ放送・都市の音

城市之声：近代上海媒介下的苏州评弹

洪 煜

[内容摘要]晚清以来，苏州评弹进入上海以后，在繁荣发达的近代大众媒介传播工具刺激下，评弹艺术进入新的发展时期。评弹在上海的发展繁荣与近代上海发达的大众媒介有着密切的关联。近代大众媒介传播超越了传统信息在时空方面的限制，使听客范围进一步扩大。在上海近代化进程中，随着城市商业经济的高度发展，大众媒介逐渐商业化，大众媒介语境中的苏州评弹成为资本主义的消费符号，评弹文化成为商家推销各自商品的工具，艺术工具化。随着近代大众媒介的发展更新，尤其是无线电广播的发展，评弹曲目类型有了新的发展，推动了评弹艺术的发展。同时，随着近代大众媒介的发展，知识分子出于自身利益的诉求，积极参与到评弹书目的编写和创作之中，从而进一步促进了评弹艺术的雅化。在近代大众媒介尤其是无线电广播的推动下，评弹艺术成为上海市民大众日常生活中重要的娱乐消费对象，听评弹成为市民大众的一种日常生活方式。评弹叮咚的三弦声成为近代上海城市的背景音乐。

[关键词]近代上海媒介；苏州评弹；无线电广播；城市之声

도시의 소리 – 근대 상해 매스미디어의 쑤저우핑탄 –

홍 이 (洪　煜)

청말 이래 샹하이 (上海, 이하 상해로 표기)로 유입된 쑤저우핑탄(蘇州評弾)은 발달, 번영하는 근대 매스미디어라는 정보 전달의 도구에 자극되어 새로운 발전기를 맞이한다. 핑탄은 상해의 번영과 근대 상해에서 발달한 매스미디어와 밀접한 관련이 있었다. 근대 매스미디어는 시공간적인 한계가 있었던 전통적인 정보전달 수단을 너머 청취자의 범위를 넓히고 있었다. 상해의 근대화 과정, 도시 상업경제의 고도의 발전에 따라 매스미디어 역시 상업화되기 시작했고 그 발전의 문맥 속에서 쑤저우핑탄은 자본주의의 소비의 기호가 되었다. 핑탄 문화는 차츰 상점이 상품을 선전하는 도구, 예술의 도구가 되어갔다. 근대 매스미디어의 발전과 진화, 특히 라디오 방송의 발전과 함께 핑탄의 곡목 종류 역시 새로운 발전을 이루어 핑탄 예술의 발전을 이끌었다. 동시에 근대 매스미디어의 발전과 함께 지식인 역시 자신들의 이익을 얻기 위해 적극적으로 핑탄의 편집 및 창작에 참가하게 되면서 핑탄 예술의 정취가 고양되었다. 이와 같이 근대 매스미디어, 특히 라디오 방송의 보급에 의해 핑탄 예술은 상해 시민의 일상 생활의 중요한 오락이자 소비 대상이 되었으며 핑탄을 듣는 일은 시민 대중의 일상생활의 양식 중 하나로 정착되었다. 핑탄에서 사용되는 3 현의 음색은 근대 샹하이 거리의 BGM이 되었다.

[키워드] 근대 상해 매스미디어, 쑤저우핑탄, 라디오방송, 도시의 소리

The urban sound - Suzhou pingtan in modern Shanghai mass media

Hong Yi

Since the end of Qing dynasty, Suzhou pingtan has flown into Shanghai. The pingtan art moves into a new stage of development stimulated by information tools such as the modern mass media. This pingtan had an intimate relationship with the prosperity of Shanghai and the development of mass media in modern Shanghai. The modern mass media gained a wider range of audience by overcoming the time and space limit existing in the traditional information transmission methods. In the modernization process of Shanghai and the high development in urban commercial economics, mass media has become gradually commercialized and Suzhou pingtan has become a symbol for consumption of capitalism. Pingtan culture became a tool for a store to advertise its own merchandise in the context of mass media development. The development and renewal in modern mass media, especially in radio broadcasting, lead to developing new varieties of tunes and lead to progress in pingtan art. At the same time, due to the progress in modern mass media, intellectuals started to actively participate in creating and editing pingtan for their own benefit which added elegance to pingtan art. According to the prevalence of modern mass media, especially in radio broadcasting, listening to pingtan became a style of daily living for the general public and pingtan art became an important entertainment and consumption target for Shanghai citizens. The sound of Sanxian used in pingtan became a background music of modern Shanghai city.

{Keywords} modern Shanghai mass media, Suzhou pingtan, radio broadcasting, urban sound

近代江南士人の戯曲改良活動と民衆教化―南社を中心とした考察―
要旨

呉強華

近代社会の転換期で、「新民」の大旗を掲げている「詩界革命」・「文界革命」・「小説界革命」が学界で激発する革新のうねりがちょうど勢いづいている時に、「すなわちまたいまだ民の愚陋・怯弱・渙散・混濁有らず、国なお能く立つる者なり」[1]を主張する士人たちはすでに“民智を開く”重心を下に移し、宣伝して目覚めさせようとする視線は一般大衆に向けられ、「曲界革命」は「三界革命」の歩みとともにすぐ歴史舞台に登った。この威勢のよい近代戯曲改良運動中で、「国内文学の指導者となす」[2]と壮語して自慢する南社の士人は「曲界革命」に対して極めて大きい熱意を表し、その構成員は近代第一の戯曲刊行物『20 世紀大舞台』と春柳社などの演芸団体を創設することに参与し、さらに大量の「民を覚す」を任務とする戯曲作品を創作し、さながら「曲界革命」の主導者とするようであり、「曲界革命」を演繹して愛国思想を宣伝すること・民族主義を提唱すること・国家の滅亡を救い生存を図ることを鼓舞する近代戯曲の改良運動を成した。本論文は南社士人を主要な研究対象とし、江南士人の戯曲改良思想と実践活動を再現し、考えることは近代の士人層が戯曲改良に熱中し、文化伝播によって民衆を教育し、彼らは社会変革の責任を担ったからには、その時代の非常事態で一群の影響と社会権威を建設することも重要な努めとしたということである。

[1] 梁啓超『新民説』鄭州　中州古籍出版社 1998 年 p46。
[2] 高旭「南社啓」、『民籟報』1909 年 10 月 17 日。

近代江南士人的戏曲改良活动与民众教化：以南社为中心的考察

提纲

吴强华

在近代社会转型期，当高举着“新民”大旗的“诗界革命”、“文界革命”、“小说界革命”在学界激起的革新浪潮方兴未艾之时，主张“则亦未有民愚陋怯弱涣散混浊，而国犹能立者”[1]的士人们已经开始将“开民智”的重心下移，将奔走呼号的目光投向了普通大众，“曲界革命”紧随着“三界革命”的步伐登上了历史舞台。在这场声势浩大的近代戏曲改良运动中，豪言以“作海内文学之导师”[2]自诩的南社士人对于“曲界革命”表现出极大的热忱，其成员参与创办了近代第一份戏曲报刊《二十世纪大舞台》与春柳社等演艺团体，更创作了大量的以“觉民”为己任的戏曲作品，俨然成为“曲界革命”的主导者，将“曲界革命”演绎成一场宣传爱国思想、提倡民族主义、鼓吹救亡图存的近代戏曲改良运动。本文以南社士人为主要研究对象，重现江南士人的戏曲改良思想和实践活动，认为近代士人群体热衷于戏曲改良，以文化传播教育民众，既是他们对社会变革的责任担当，也是他们在时代大变局中营建群体影响和社会权威的重要努力。

[1] 梁启超：《新民说》，郑州：中州古籍出版社，1998 年，第 46 页。
[2] 高旭：《南社启》，《民吁报》1909 年 10 月 17 日。

근대 강남 사인의 희곡 개량 활동과 민중 교화 – 남사를 중심으로 한 고찰 –
요지

우 챵후아 (呉強華)

근대사회의 전환기에서「신민_新民 」의 기치를 내건 「시계혁명_ 詩界革命」・「문계혁명_文界革命」・「소설계혁명_小説界革命」이 학계에서 격발한 혁신의 물결이 높아져갈 무렵, 「바로 지금, 그리고 아직까지 민에게 어리석음 (愚陋) ・심약함 (怯弱) ・흩어짐 (渙散) ・혼탁함 (混濁)이 없어, 나라를 더 능히 일으켜 세울 자로다」[1]를 주장하는 사인들은 이미 “민지 (民智)를 열” 중심을 아래로 이동하여, 선전하고 각성시키려는 시선을 일반 대중에게 돌리고 있었다.「곡계혁명_ 曲界革命_」은「삼계혁명_ 三界革命」의 진전과 함께 곧 역사의 무대에 올랐다. 이러한 근대 희곡 개량 운동의 위세 속에서, 국내 문학의 지도자가 될 것[2]이라고 장담했던 남사(南社)의 사인들은 곡계혁명에 대해 매우 높은 열의를 나타냈다. 그 구성원들은 근대 제일의 희곡 간행물인 『20 세기 무대사_20 世紀大舞台』와 춘류사_春柳社 등 연예 단체의 창설에 참여하였으며 또한 다수의「민을 깨우는」것을 임무로 한 희곡 작품을 창작했다. 완연히「곡계혁명」의 주도자가 되어,「곡계혁명」을 연역해서 애국 사상의 선전・민족주의의 제창・멸국을 구하고 생존을 도모하는 것을 고무하는 내용의 근대 희곡 개량운동을 이루었다. 본고는 남사 사인_南社士人을 주요한 연구대상으로 하여 강남 (江南) 사인의 희곡 개량 사상과 실천활동을 재현하여 고찰하고자 한다. 이는 근대 사인 층이 희곡 개량에 열중하여 문화 전파에 의해 민중을 교육시키는 사회 변혁의 책임을 맡아, 그 시대의 혼란 속에서 일정부분 영향력을 행사하고 사회 권위를 세우는 데에 중요한 역할을 했다고 보기 때문이다.

1）梁啓超『新民説』鄭州　中州古籍出版社 1998 年 p46。
2）高旭「南社啓」、『民籲報』1909 年 10 月 17 日。

Drama improvement activities of modern Jiāngnán intellectuals and people edification: a consideration focusing on Nán shè
Abstract

Wu Qianghua

Exactly during the transition period of modern society, when “The Revolution in Poetic Circles”, “The Revolution of Text World”, “The Revolution of Novel World” have set up a large flag of “new people” and the innovation waves were gaining pace in the academia, intellectuals that were stating the following: “in other words, the state will stand well when there are no foolishness, cowardliness, lysis and mud of common people”[1], were already “opening the people intellect” and moving the center of balance downwards, the focus was put on the general public in order to awake it with the help of propaganda, and “Music World Revolution” has also entered the historical stage together with “Revolutions of Three Worlds”. During this energetic modern drama improvement movement, the Nán shè intellectuals who praised themselves as “being the leaders of domestic literature”[2], have been extremely enthusiastic about the “Music World Revolution”, and among them there were members who participated in founding the entertainment organizations such as the first modern drama publication “A 20th century big stage” and “Spring willow company”. In addition, they created a great number of drama works the duty of which was to “awake the people”, and, behaving just as the leaders of “Music World Revolution”, they deduced the “Music World Revolution” and inspired promotion of patriotic ideas, advocating democracy and objective to survive by avoiding the fall of the state, thus creating the movement to improve modern drama. This paper’s major research target are the intellectuals of Nán shè, we reconstruct their drama improvement ideas and practical activities, it can be said that the intellectuals class was enthusiastic about drama improvement, they were educating the general public by means of culture propagation, and because they took a job of bearing the responsibility for social changes, they also considered their important duty to construct certain influence and social authority within the state of emergency of that period.

吉原の女芸者の誕生―付、描かれた女芸者　　発表要旨

浅野秀剛

吉原の女芸者については、安永八年に、大黒屋正六が見番を作って登録、統率してからは、遊女と完全に区別されたが、それ以前の実態については、必ずしも明らかでない。

江戸市中に増えた踊子が売春をするようになり、それを摘発し始めるのは享保期であるが、摘発された踊子は吉原に送られた。一方、吉原には、男の芸者だけでなく、女性の師匠も廓内に住し、遊女に芸事を指南していたものと思われる。しかし、吉原の女芸人が自然にその数を増し、明和期以降の吉原芸者になったわけではない。吉原芸者が増えて遊女とは別の職分を獲得し、確固たる地位を確立する契機は、市中の踊子が隠売女取締りの一環として吉原に送りこまれたことにある。その契機となったのが元文五年の摘発であろう。摘発の後に出された吉原細見に見える「おどりこ」は、遊女と分離された女芸者ではなく、踊子の遊女、すなわち芸に秀でた遊女の意味と思われる。しかし、その踊子は、求められれば芸者として外の座敷へ貸し出されたことが確認できる。吉原内に、原則として売春をしない女芸者の存在が確認できるのは宝暦期である。宝暦・明和期には、遊女と女芸者の分離が進み、明和後期には、吉原細見の巻末に男女の芸者の名寄せが載るようになる。その「吉原けいしやの部」に記載されている芸者が、後に見番芸者に移行するわけである。寛政七年十二月に作成された「新吉原町遊女屋規定証文」によると、当時の吉原芸者の所属には「遊女屋抱・茶屋抱・素人抱、并自分稼之分」の四種あった。このうち、「遊女屋抱」は遊女屋に属する内芸者、「茶屋抱」は引手茶屋などが抱えていた芸者、「素人抱」に相当するのは置屋に所属する芸者、「自分稼之分」は自宅から通う芸者を指すものと考えられる。

吉原の女芸者が錦絵になるのは、明和後期からであり、それは、遊女と女芸者の分離と無関係ではない。吉原の女芸者が連続して錦絵に登場するようになるのは、安永五年の吉原俄以降のことと思われる。

吉原女艺妓的诞生–被画的女艺妓

浅野 秀刚

虽然在永安八年，借由大黑屋正六制作见番（译者注：见番是管理当地料理屋、艺人屋和茶室三个行业组织的事务所之俗称）并予以登记的行为，给予了吉院的女艺妓和游女以完整的区分，但是到目前为止，有关吉院女艺妓的详细情况还不得而知。

享保年间，在江户市区增多的踊子由于卖春受到检举，于是被送到了吉原地区。在另一方面，吉原的郭内不止居住着男艺人，还住着女性师匠，指导着游女的技艺。但是，这并不意味着随着吉原女艺妓在数量上的增加，就在明和时期之后让她们自然而然变为了吉原艺妓。也就是说，江户市区中取缔踊子卖春，并把她们送来吉原的这一背景环节，是让吉原艺妓在游女的增长中获得了与之不同的职份，并且取得了坚实的地位的契机。这一契机，正是元文五年的检举。在检举之后出版的吉原细见（译者注：一种介绍册子）中提及的“おどりこ（踊子）”，并不是指区别于游女的女艺妓，而是指作为踊子的游女，即精于艺能的游女的意思。然而，如果受到要求的话，这样的踊子是可以被包出场带到宴会席上的。在宝历时期的吉原之内，我们可以确认存在有原则上不卖春的女艺妓。在宝历、明和时期，游女和女艺妓的被进一步加强区分，到了明和后期，在吉原细见的卷末出现了列有男女艺者人名的单子。在那里的“吉原艺者之部”中所记载的艺妓，在之后被转而登记在了见番艺妓之中。作于宽政七年十二月的“新吉原町游女屋规定证文”，提到了当时吉原艺妓有以下四种所属之分，即“游女屋抱、茶屋抱、素人抱，并自分稼之分”。其中“游女屋抱”是指所属于游女屋的内艺妓，“茶屋抱”是指引手茶屋所拥有的艺妓，“素人抱”指的是属于置屋的艺妓，而“自分稼之分”指的是从自家屋门出门迎客的艺妓。

吉原的女艺妓被绘画在锦绘之上，是明和后期之后的事情，这与游女和女艺妓被区别开来不无关系。而吉原的女艺妓连续出现在锦绘之上，已经是安永五年的吉原之后的事情了。

요시와라의 여자 게이샤의 탄생 - 묘사된 여자 게이샤 -

아사노 슈고

요시와라의 여자 게이샤 (芸者)는 안에이 8 년 (安永, 1779 년), 다이코쿠야 쇼로쿠 (大黒屋正六)가 권번을 만들어 등록, 통솔하게 된 이후에는 유녀_遊女와 완전히 구별되게 되었지만 그 이전의 실태에 대해서는 완전히 밝혀져 있지 않다.

에도 시중에 증가한 오도리코 (踊子)가 매춘을 하게 되어 그것을 적발하기 시작한 것은 쿄호기 (享保期: 1716~1735)인데, 적발된 오도리코는 요시와라로 옮겨졌다. 한편 요시와라에는 남자 게이샤뿐만 아니라 여자 사범도 곽내에 거주하면서 유녀에게 예능을 가르쳤던 것으로 생각된다. 그러나 요시와라의 여자 게닌 (芸人)들이 자연스럽게 증가하여 메이와기 (明和期: 1764~1771) 이후 요시와라 게이샤가 된 것은 아니다. 요시와라 게이샤가 증가하여 유녀와는 다른 직분을 획득, 확고한 지위를 확립하는 계기는 시중의 오도리코가 카쿠바이죠 (隠売女, 불법 성매매) 단속의 일환으로 요시와라로 이송된 것이다. 그 계기가 된 것이 겐분 5 년 (元文, 1740)의 적발일 것이다. 적발 후 발간된 요시와라사이켄 (吉原細見: 요시와라 유곽 안내서)에 묘사된「오도리코 (おどりこ)」는 유녀와 분리된 여자 게이샤뿐 아니라 오도리코인 유녀, 즉 기예가 뛰어난 유녀의 의미로 사용되었다고 생각된다. 하지만 그 오도리코 (踊子)는 요구가 있으면 게이샤로서 외부에서 열리는 연회에 대여되었던 것으로 확인된다. 요시와라 내부에 원칙으로 매춘을 하지 않는 여자 게이샤의 존재를 확인할 수 있는 것은 호레키기 (宝暦期: 1751~1763)이다. 호레키・메이와 기에는 유녀와 여자 게이샤의 분리가 진행되었으며 메이와 후기에는 요시와라사이켄 권말에 남녀 게이샤의 인명록이 게재되기에 이른다. 그 「요시와라게이샤 일람(吉原けいしやの部)」에 기재된 게이샤가 후에 권번 게이샤로 이행하는 것이다. 칸세이 7 년 (寛政, 1795 년) 12 월에 작성된「신 요시와라 유곽 규정증문 (新吉原町遊女屋規定証文)」에 따르면 당시 요시와라 게이샤의 소속은 「遊女屋抱・茶屋抱・素人抱、并自分稼之分」로 4 종류였다.

그 중「遊女屋抱」는 유곽에 속한 우치게이샤 (内芸者), 「茶屋抱」는 히키테챠야 (引手茶屋: 유곽에서 손님들을 유녀집으로 안내하는 찻집)가 보유하고 있던 게이샤, 「素人抱」에 해당하는 것은 오키야 (置屋: 포주집)에 소속된 게이샤, 「自分稼之分」은 자택 출근하는 게이샤를 가리키는 것으로 생각된다.

요시와라의 여자 게이샤가 니시키에 (錦絵)에 나타나는 것은 메이와 후기부터이며, 그것은 유녀와 여자 게이샤의 분리와 관계가 있다. 요시와라의 여자 게이샤가 계속해서 니시키에에 등장하게 되는 것은 안에이 5 년(1776 년)의 요시와라니와카 (吉原俄) 이후라고 생각된다.

The birth of female geisha in Yoshiwara - portrayed female geisha

Asano Shugo

Female geisha in Yoshiwara were clearly differentiated from "Yujyo" (prostitutes) in 1779 by Daikokuya Shoroku who created an assignation office and a registration system for geisha. The actual situation of geisha had not been clear before then.

An increased number of dancers in Edo-city led some into prostitution. An increase in dancers who were prostitutes being apprehended started in the Kyoho period (1717~1736) and those who were caught were remanded to Yoshiwara. In Yoshiwara, there were not only man geisha but woman teaching artistic accomplishments to yujyo. Although, the dawn of the "Yoshiwara Geisha" after the Meiwa period (1764~1772) is not the result of naturally increased number of female entertainers in Yoshiwara. The Yoshiwara geisha had the opportunity to acquire different work from yujyo and established firm status as a result of dancers apprehended in Edo-city thorough the prostitution regulation process and remanded to Yoshiwara. This opportunity first came when there was a revelation in 1740. According to the "Yoshiwara Saiken" (Yoshiwara Guide book) published after the revelation, "Odoriko" does not signify a female entertainer separated from yujyo but yujyo dancer with high entertainment skills. Those dancers performed outside of Yoshiwara at the request of a patron. Geisha who do not prostitute in principle were first confirmed in Yoshiwara during the Houreki period (1751~1764). The distinction between female geisha and yujyo continued during the Houreki and Meiwa period and in late Meiwa period, male and female geisha appear in the last pages of Yoshiwara Saiken. Those geisha appeared in "Yoshiwara keishiya no bu" will be "kenban geisha"(geisha assigned to the office) in the future. According to the "new Yoshiwara town yujyo-ya regulation bond" created in December 1795, there were four kinds of categories which geisha belonged to. There were "Yujyoya kakae", "Chaya kakae", "Shirouto kakae" and "并自分稼之分". "Yujyoya kakae" refers to geisha affiliated to a brothel. "Chaya kakae" refers to geisha affiliated to a teahouse that introduces clients to geisha. "Shirouto kakae" refers to geisha affiliated to "Okiya" (a house where geisha inhabited). "并自分稼之分" refers to geisha who appears from their own residence.

After late Meiwa period, female geisha in Yoshiwara started to appear in colored woodblock prints and this phenomenon is related to the distinction between female geisha and yujyo. The continuous appearance of female geisha in Yoshiwara in colored woodblock prints can be seen after "Yoshiwara niwaka" (improvisation play which took place in Yoshiwara) in 1776.

清代、辺境都市打箭爐の形成と発展

柳　静我（ユウ　チョンア）

清代における打箭爐（tib. dar rtse mdo ダルチェンド、のちに康定へと改称）は、康熙年間に発生した土着勢力による紛争が清朝軍の介入によって鎮圧された後、四川省の管轄に入った地域である。その後、打箭爐に城郭が建設され、辺境都市としての大きく発展した。打箭爐の都市空間をみると、東には関帝廟・漢人寺等が、西にはチベット仏教系の寺が配置され、漢人とチベット人の居住区域が明確に区分されていることが確認できる。そして清朝は、漢人とチベット人の管理を打箭爐同知及び明正土司と分離させていた。当時、ラサに向かう清朝の使節らは、打箭爐を通過する際、「口内」から「口外」へ行くとし、中国文明とは全く異なるチベット仏教世界に入る境として認識していた。

その一方、打箭爐は、清代を通してチベット全域で消費される茶葉の殆どが取引される「辺茶貿易」の中心地であった。清朝政府は打箭爐での「辺茶貿易」を互市貿易とし、関税を徴収する機構を設置し、その取引の管理を行った。打箭爐で辺茶貿易を担う漢人商人は陝西商人の数が一番多く、内地からチベットに入る茶葉の殆どが彼らの手によって取引された。陝西商人は打箭爐で「鍋荘」というチベット人の仲介業者を通じてチベット人商人と貿易を行った。鍋荘は、明正土司と深い関係をもつチベット人による商業組織であり、中国語とチベット語に通訳・違う取引方法の媒介・倉庫業などの業務を行うなど、中国語が流暢で中国文化に精通した彼らの存在は漢人商人が打箭爐でチベット人商人と取引をする上で欠かせないものであった。

打箭爐における漢人商人の進出の拡大は、在地の商業団体である鍋荘を貿易に特化した組織へと変容させ、更にその規模の拡大をもたらす一方、打箭爐における陝西街の出現と会館の建立などで打箭爐の都市空間のなかで中国文明を体現する施設を増やしていくものであった。

清代边境城市打箭炉的形成与发展

柳　静我

清代打箭炉（tib. dar rtse mdo，后改称康定），在康熙年间，该地域的当地势力发生纷争，清朝军队介入而加以镇压之后，归入四川省管辖。其后，打箭炉建造了城郭，作为边境城市得到了很大发展。观看打箭炉的城市空间，可以确认东面有关帝庙和汉人寺等寺庙，西面则配置了藏传佛教的寺院，汉人和藏人的居住区域被明确区分开来。而清朝又将汉人和藏人分别由打箭炉同知和明正土司来管理。当时，前往拉萨的清朝使节们，在经过打箭炉的时候，说是从“口内”走向“口外”，认为这是进入迥异于中国文明的藏传佛教世界的边界。

另一方面，打箭炉在有清一代是西藏全境所消费的几乎所有茶叶进行交易的“边茶贸易”中心地。清朝政府把打箭炉的“边茶贸易”作为互市贸易，设置了征收关税的机构，对交易进行管理。在打箭炉从事边茶贸易的汉族商人中，陕西商人的人数最多，从内地进入西藏的茶叶差不多都由他们经手进行交易。陕西商人在打箭炉通过被称为“锅庄”的藏族中介人，与藏族商人进行贸易。锅庄是和明正土司关系密切的藏人商业组织，从事汉语和藏语的翻译、不同交易方法的中介、仓库业等业务，汉语流利且精通中国文化的他们，是汉族商人在打箭炉与藏族商人进行交易时不可或缺的存在。

汉族商人在打箭炉的日益扩张，使当地的商业团体锅庄变成了专门从事贸易的特定组织，并使其规模得到扩大，另一方面，随着陕西街的出现和会馆的建立等等，在打箭炉的城市空间中，增加了体现中国文明的设施。

청대 변경도시 다젠루의 형성과 발전

유정아

청대의 다젠루 (打箭爐: tib. dar rtse mdo, 후에 캉딩<康定>으로 개칭)는 강희연간에 발생한 토착세력의 분쟁이 청조군의 개입으로 진압된 후 쓰촨성(四川省) 관할에 들어간 지역이다. 그 후 다젠루에 성곽이 건설되어 변경도시로서 크게 발전했다. 다젠루의 도시공간을 보면, 동쪽에는 관제묘, 한인사 (漢人寺) 등이, 서쪽에는 티벳 불교 계통의 절이 배치되어 한인과 티벳인의 거주지역이 명확하게 구분되어있었다는 것을 확인할 수 있다. 그리고 청조는 한인과 티벳인 관리를 다젠루 동지_同知와 명정토사_明正土司로 분리했다. 당시 라사로 향하는 청조의 사절들은 다젠루를 통과할 때 입구 안(口內)에서 입구 바깥(口外)으로 간다고 하여 중국문명과는 전혀 다른 티벳 불교세계로 들어가는 경계로서 인식했다.

한편, 청대의 다젠루는 티벳 전역에서 소비되는 찻잎의 대부분이 거래되는 변차무역_边茶貿易의 중심지였다. 청조정부는 다젠루에서의 「변차무역」을 호시무역_互市貿易으로 삼아 관세를 징수하는 기구를 설치하여 거래를 관리했다. 다젠루에서 변차무역을 하는 한인 상인은 샨시 상인(陝西商人)이 가장 많았으며, 내지에서 티벳으로 들어가는 찻잎의 대부분이 그들의 손에서 거래되었다. 샨시 상인은 다젠루에서「궈좡(鍋莊)」이라고 하는 티벳인 중개업자를 통해서 티벳인 상인과 교역했다. 궈좡은 명정 토사와 깊은 관계를 가진 티벳인에 의한 상업 조직으로, 중국어와 티벳어의 번역, 다른 거래방법 매개, 창고업 등의 업무를 하는 등, 중국어가 유창하고 중국 문화에 정통하여 한인 상인이 다젠루에서 티벳인 상인과 거래할 때 없어서는 안 될 존재였다.

다젠루에 있어서 한인 상인의 진출 확대는 재지 상업단체인 궈좡을 무역에 특화된 조직으로 변용시켜 그 규모 또한 확대시킨 한 편, 샨시 거리의 출현, 회관 건립 등 다젠루의 도시공간 안에 중국문명을 체현하는 시설을 증가시키는 요인이기도 했다.

Qing dynasty, formation and development of border city Darzêdo

Yu Jeungah

Darzêdo (tib. dar rtse mdo, later renamed into Dardo) during Qing period has been an area that went under jurisdiction of Sichuan after the conflict that arose because of indigenious forces during Koki period, and was suppressed by military forces of Qing dynasty. After that, a castle was built in Darzêdo and it developed largely as a border city. If we take a look at the urban space of Darzêdo, we can understand that in the east there are Kantei-bo and Chinese temples etc., while the temples of Tibetan Buddhism system are located in the west, and living quarters of Chinese and Tibetan are clearly separated from one another. The Qing dynasty divided the duties of administering Chinese and Tibetan people between the Tongzhi (subprefects) of Darzêdo and Tusi (headmen) of Ming Zheng. The ambassadors of Qing dynasty that were heading to Lhasa at that time, when they were passing Darzêdo, were considered to go from “within” to “outside” world, and it was considered to be a borderline with the world of Tibetan Buddhism completely different from that of Chinese civilization.

On the other hand, Darzêdo was the center of “tea for vicinities trade” in which almost all tea leaves consumed within Tibet region have been transacted via the Qing dynasty. The government of Qing dynasty considered “tea for vicinities trade” to be a border trade, set up a structure that collected the customs, and controlled these transactions. Shaanxi merchants constituted the majority among Chinese merchants who were engaged in tea for vicinities trade in Darzêdo, and almost all of the tea leaves that entered Tibet from inland were transacted through their hands. In Darzêdo, Shaanxi merchants conducted trade with Tibetan merchants via the Tibetan intermediaries called “guo zhuang”. “Guo zhuang” were commercial organizations that had close connections with Tusi of Ming Zheng. They provided services such as interpretation into Chinese and Tibetan, mediation of different method of transaction, warehousing etc., their staff was fluent in Chinese and competent in Chinese culture, so their existence was indispensable for Chinese merchants having transactions with Tibetan merchants in Darzêdo.

Expansion of the advance of Chinese merchants in Darzêdo changed the Guo zhuang, which were settled commercial organizations, into organizations that specialized in trade, and caused its expansion. At the same time, it has also increased the number of facilities that embody Chinese civilization within the urban space of Darzêdo after emergence of Shaanxi district in Darzêdo and erection of public centers etc.

都市社会史の方法－日本近世都市史研究の展開と大坂－　　2013/1207

（頭脳総括シンポ／塚田　孝）

【要旨】

近世日本において、大坂は最大時には人口 40 万を越える巨大都市であり、人口 100 万の江戸（明治以降の東京）に次ぐ日本で第 2 の都市であった。政治権力の所在した江戸に対して、大坂は経済都市としての性格が強かった。しかし、都市の住民生活の基礎単位として「町」があることは共通していた。1980 年代からの近世都市史研究の飛躍はこの町とその細胞ともいうべき町屋敷（大坂では家屋敷という）への着目があった。本報告では、①まず簡単に近世都市史研究の展開とその方法的特徴について触れ、大坂の都市史を捉える視角を見定め、②続いて大坂の歴史展開＝「大坂の都市史」を略述する。その上で、最後に上海の都市社会史との比較共同の可能性について触れる。

大坂の都市史の概観の上で述べた方法についての小括の部分を以下に掲げる。

都市社会を解明するには、例示的にあげた町と家請人仲間、町と垣外仲間や株仲間相互の複雑なからまりを解きほぐす必要がある。そして、こうしたからまりを具体的に見ていくと、身分的周縁の集団や現象が浮かび上がってくる。今日における近世大坂研究の課題は、これらを総体として追求することである。

その際の方法的視角について若干の言及をしておきたい。報告者は、これまで歴史分析の三つの位相（①集団の論理を共有する集団内の人々の位相、②異なる論理が交錯して実際に形成されている社会関係の位相、③それらの外部にそれらを取り巻く世論・世相の位相）を区別しながら、それらを総合的に捉えることが必要であると主張してきた。ここで言うところの（社会）集団とは、武士の家中や宗教者の集団、町や株仲間、垣外仲間（非人集団）などである。

そしてこれらの社会諸集団が、それぞれ自律的な「法」を持つ団体であることに注目して、先の歴史分析の 3 つの位相を都市大坂に即して具体的に捉える方法として「都市法」について、①都市空間全体を覆う公儀法度、②多様な社会集団の内部を規律する法、③そうした社会集団間の関係を規定する法の 3 つのレベルを総合的に把握する必要があると提言している。大坂町奉行所から大坂三郷に触れられる町触などは、①レベルの公儀法度であるが、それを発布する武士身分には主従制のもとに結合する家中（集団）の利害が貫いていた。町法や垣外仲間の法は、②レベルの法の例である。③レベルの集団間の関係を相互に規定する法として、株仲間相互間の「申合せ」なども広く見られたが、非人集団と町の関係などは、2 つの集団が異なる集団内法（②レベル）をもち、両者の異なる論理が交錯するところに現実の垣外番という存在が存立していたのである。

都市社会の複雑に絡み合う実態を解きほぐしていく分析方法として、〈法と社会〉の視角の有効性を提起しておきたい。

城市社会史的方法——日本近世城市史研究的展开和大坂　　2013/1207

塚田　孝

【提要】

在近世日本，大坂在鼎盛时期人口超过了 40 万，是个巨大城市，仅次于人口 100 万的江户（明治之后的东京），是日本第二大城市。相对于政治权力中心的江户，大坂作为经济城市的特征很显著。不过，两座城市都有“町”，它是城市居民生活的基础单位，这是共通之处。自 1980 年代以来近世城市史研究的一个飞跃，就是注意到这个町以及可以称为它的细胞的町屋敷（大坂称家屋敷）。本报告主要讨论以下几个问题：①首先，简单地谈谈近世城市史研究的展开及其方法上的特征，对研究大坂城市史的视角进行定位；②接着，略述大坂的历史发展，即“大坂的城市史”。在此基础上，最后谈谈与上海城市社会史进行比较的可能性。

概观大坂城市史之后所阐述的方法，其小结部分陈示如下。

在阐明城市社会的时候，必须解开例举的町与家请人仲间、町与垣外仲间和株仲间相互之间的复杂关系。然后，具体地来看这些关系，于是，身份边缘集团和现象就显露出来的。现在的近世大坂研究课题，将这些作为总体来探求。

关于研究的方法视角，我想谈谈若干点。我认为，要对迄今为止的历史分析的三个位相（①共有集团法则的集团内部人的位相；②不同法则交错而实际形成的社会关系的位相；③在这些外部围绕着它们的舆论和世态的位相）进行区别，同时对它们进行综合把握。这里所说的（社会）集团，是指武士的家中和宗教者的集团、町和株仲间、垣外仲间（非人集团）等。

然后注意到这些各种社会集团，是拥有各自“法”的自律性团体。将前述历史分析的三个位相，结合大坂城市进行具体的把握，作为方法的“城市法”，我提议需要进行以下三种层次的综合性把握：①覆盖城市空间整体的公仪法度；②规约多种多样社会集团内部的法；③规约这些社会集团之间关系的法。从大坂町奉行所到大坂三乡里讲到的町触等等，都是第一个层次的公仪法度，由此颁布的武士身份中贯穿着聚集于主从制之下的家中（集团）利害关系。町法和垣外仲间的法，是第二个层次的法的例子。作为第三个层次的相互规约集团间关系的法，也能广泛地见到株仲间相互之间的“协议”等，但是非人集团和町的关系，两个集团拥有不同的集团内法（第二层次），在不同法则的两者交错之处，存在着现实中的垣外番。

城市社会错综复杂，作为阐明其实际状态的分析方法，我想提出“法与社会”这一视角的有效性。

도시사회사의 방법 – 일본 근세 도시사 연구의 전개와 오사카 –

츠카다 다카시

근세 일본에 있어서 오사카(大坂)는 인구가 최대 40 만을 넘는 거대도시이자, 인구 100 만의 에도(메이지 이후 도쿄)에 이은 일본의 제 2 도시였다. 정치권력의 소재지인 에도에 비해 오사카는 경제도시로서의 성격이 강했다. 그러나 도시 주민생활의 기초단위로서 [마치/쵸(町)]가 있다는 것은 공통점이었다. 1980 년대 이후의 근세 도시사 연구의 비약은 이 마치와 그 세포라고 할 수 있는 마치야시키 (町屋敷, 오사카에서는 이에야시키<家屋敷>라고 한다)에 대한 주목이 있었다. 본 발표에서는 ①먼저 간단하게 근세 도시사 연구의 전개 및 그 방법적 특징에 대해 설명하고, 오사카 도시사를 파악하는 시각을 확인한 후, ②오사카의 역사전개=「오사카의 도시사」를 약술하겠다. 이를 바탕으로, 마지막으로 샹하이의 도시사회사와의 비교/공통의 가능성에 대해서도 이야기할 것이다.

오사카의 도시사의 개관에 있어서, 앞서 설명한 방법에 대한 소괄 부분을 다음과 같이 들겠다.

도시사회를 해명하기 위해서는 예시적으로 든 마치와 이에우케닌나카마(家請人仲間), 마치와 카이토나카마 (垣外仲間) 및 카부나카마 (株仲間) 상호간의 복잡한 얽힘을 규명할 필요가 있다. 그리고 이러한 얽힘을 구체적으로 살펴보면, 신분적으로 주변에 있는 집단 및 그 현상이 떠오른다. 현재의 근세 오사카 연구의 과제는 이들을 총체로서 고찰하는 것이다.

그 때의 방법적 시각에 대해 약간 언급하자면, 발표자는 지금까지 역사분석의 3 가지 층위 (①집단의 윤리를 공유하는 집단 내 사람들의 층위, ②서로 다른 논리가 교착되어 실제로 형성되어 있는 사회관계의 층위, ③층위 내부의, 층위들을 둘러싼 여론, 세태의 층위)를 구별하면서 그들을 총체적으로 파악하는 것이 필요하다고 주장해 왔다. 여기서 말하는 (사회)집단이란, 무사의 카슈 (家中)나 종교자 집단, 마치와 카부나카마, 카이토나카마 (히닌_非人_집단) 등이다.

그리고 발표자는 이들 사회집단들이 각각의 자율적인「법」을 가지는 단체임에 주목하여, 전술한 역사분석의 3 가지 층위를 도시 오사카에 적용해서 구체적으로 파악하는 방법으로서「도시법」에 관해, ①도시공간 전체에 적용되는 공의법도, ②다양한 사회집단 내부를 규율하는 법, ③그러한 사회집단간의 관계를 규정하는 법이라는 3 가지 레벨을 종합적으로 파악할 필요가 있음을 제언했다. 오사카마치부교쇼(大坂町奉行所)에서 오사카상고 (大坂三郷)에 적용한 마치부레 (町触) 등은 레벨①의 공의법도에서 보면, 그것을 공포하는 무사신분에게는 주종제를 바탕으로 결합하는 카슈 (집단)의 이해가 깔려있었다. 쵸법 (町法)이나 토카이나카마 법은 레벨②의 예이다. 레벨③의 집단간의 관계를 상호적으로 규정하는 법으로서 카부나카마 상호간의「모시아와세 (申合せ)」역시 널리 관찰되었는데, 히닌 집단과 마치의 관계 등은 2 개 집단이 서로 다른 집단 내 법 (레벨)을 가졌기 때문에, 양 쪽의 서로 다른 논리가 교착하는 부분에 현실의 카이토방 (垣外番)이라는 존재가 존립했다.

이와 같이 도시사회의 복잡하게 얽혀 있는 실태를 풀어내기 위한 분석방법으로「법과 사회」의 시각의 유효성을 제기할 수 있겠다.

Methodology in social history of cities: Development in the research of early-modern Japanese cities' history and Osaka

Tsukada Takashi

Abstract

In early-modern Japan, Osaka had at most 400 thousand inhabitants, and was second biggest city in Japan after Edo (Tokyo after Meiji) with population of one million. Compared to Edo, which was political center, Osaka was strongly characterized as economic city. However, what had these cities in common was that the basic unit of residents' life was *machi* (town). The development in the research on the history of early-modern cities in Japan since 1980 was also focused on the *machi* and *machi yashiki* (or houses called *ie yashiki* in Osaka) that represented its cells. In this paper, 1) I discuss the development in the early-modern city history research and its methodological characteristics, ascertain the focus on the history of Osaka 2) and briefly outline the historical development in Osaka or the "city history of Osaka". Finally, based on this I address the possibility of comparison with the social history of Shanghai city. Below, I summarize the methodological issues based on the outline of the city history of Osaka.

In understanding the society of cities, it is necessary to unravel the complicated and intertwined relationships between the *machi* and 家請人仲間, *machi* and *kaito nakama* or *kabu nakama*. By exploring these relations, the groups and phenomena encircling an individual emerge as well. One of the present topics of the early-modern Osaka history research is to consider these as whole.

I address this issue briefly form the methodological perspective. Reporters recognized three levels (1, the level of individuals sharing the logic of groups, 2, the level where different logics intersect and social relations are formed, 3, the level of public opinion or social conditions located outside of these and encompassing them) in the analysis of history and argued that it is necessary to consider them combined. The (social) groups referred to represent the *bushi* families or religious groups, *machi* or *kabu nakama*, *kaito nakama* (group of *hinin*) etc.

Furthermore, regarding these (social) groups, I focus on the autonomous "laws" that these groups have and in line with the previous three levels in the historical analysis I apply it on the city of Osaka in "city method" and propose that it is necessary to consider all three levels comprehensively. Particularly, I consider the 1, official law system that encompass the whole city space, 2, diverse laws governing the social group internally and 3, laws governing the relationships between such social groups. The *machibure* ordinances from the Osaka town magistrate to Osaka Sango are the level 1 magistrate law systems, but it is penetrated by the interests of the *bushi* organized in a vassal-lord alliances *kachu* (groups) who promulgated these ordinances. The *machi* laws or *kaito nakama* laws are examples of the level 2 laws. As an example of the law governing mutual relationships between groups, the *moshiawase* arrangements of the *kabu nakama* were widely recognized, but there existed relationships between groups that held different internal rules such as *hinin* and *machi* and in the space where these two different logics mingle existed entities such as *kaitoban*.

I propose the perspective of "law and society" as an effective analytical method to unravel the realities of the city society intertwined in a complex way.

19 世紀前期清代重慶債務訴訟中の「証拠」問題

邱澎生
（香港中文大学歴史系　pschiu2007@gmail.com ）

要旨

中国国内の長距離貿易の発展につれて、商業訴訟というのはすでに清代前期の重慶城内で日常的に発生する重要な活動の一つであり、この角度から言うと、商業訴訟の発生過程と処理経過を探求するのは、都市史研究の重要課題でもある。本論文は「巴県档案」収録の乾隆・嘉慶年間のいくらかの商業訴訟档案によって、18 世紀末・19 世紀初め、長江上流の重慶という最も重要な水運商業都市の中で、商業についての債務と出資者紛争が発生した時・商人相互の間での衝突・対立や協議に当たっていったいどのように進めるのか、同時に、地方官員はまたどのような方法でこれらの商業訴訟を処分するかを分析する。特に商業行為中の各種契約・帳簿と書簡などの「証拠」問題は、司法官員は審理過程中で、通常いかに調査と判断を進めるかに焦点を定める。この証拠を調査し判断する過程の内で、また当時の中国の都市における日常生活の重要な側面も現れた。

十九世紀前期清代重慶債務訴訟中的「證據」問題

邱澎生
（香港中文大學歷史系，pschiu2007@gmail.com ）

摘要

隨著中國國內長程貿易的發展，商業訴訟已是清代前期重慶城內經常發生的重要活動之一，從這個角度說，探究商業訴訟的發生過程與處理經過，也是城市史研究的重要課題。本文以「巴縣檔案」收錄清代乾隆、嘉慶年間的幾件商業訴訟檔案，分析十八世紀末、十九世紀初年，在長江上游重慶這個最重要的水運商業城市裏，當發生商業方面的債務與合夥糾紛時、商人彼此之間的衝突、對抗與協商到底如何進行？同時，地方官員又是以哪些不同方式來處理這些商業訴訟？特別是針對商業行爲中的各種契約、帳冊與書信等「證據」問題，司法官員在審理過程中，通常是如何進行調查與判斷？在這個調查與判斷證據的過程裏，也呈顯了掌時中國城市日常生活的一個重要側面。

19 세기전기 청대 충칭 채무소송 중「증거」문제

치우 펑셩 (邱澎生)
(홍콩중문대학 역사계)

요지

중국 국내 장거리무역이 발전함에 따라 상업 소송은 이미 청대 전기에 충칭(重慶) 성내에서 일상적으로 발생하는 중요한 활동의 하나였다. 이러한 시각에서 보면 상업 소송의 발생 과정과 처리 경과를 고찰하는 것은 도시사 연구의 중요 과제이기도 하다. 본고는「파현당안_巴県档案 」에 수록된 건륭_乾隆・가경_嘉慶 연간의 상업 소송 당안 중 일부를 통하여, 18 세기 말・19 세기 초 충칭이라는 장강_長江 상류에 위치한 가장 중요한 수운 상업도시 안에서 상업에 대한 채무와 출자자 분쟁이 발생했을 때 상인 상호간의 충돌・대립 및 협의가 어떻게 진행되었는지, 동시에 지방 관원들은 어떠한 방법으로 이러한 상업소송들에 대처하였는지를 분석할 것이다. 특히 상업 행위 중 각종 계약・장부와 서간 등의「증거」문제에 관해 사법 관원들이 심리 과정 중에 주로 어떠한 방법으로 조사와 판단을 진행했는지에 초점을 맞출 것이다. 이 증거를 조사하여 판단하는 과정에서 당시 중국 도시의 일상생활의 중요한 측면도 함께 나타나는 것이다.

The problem of “evidence” in debt lawsuits of Qing period Chongqing in the first part of the 19th century

Chiu Peng-sheng
(The Chinese University of Hong Kong, Department of History, pschiu2007@gmail.com)

Abstract

With development of long-distance trade in China, commercial lawsuits already became an important activity that took place on a regular basis within Chongqing city during the first part of Qing period, and if we consider the situation from this viewpoint, it will turn out that investigating the process of their development and processing progress of commercial lawsuits is a very important issue in urban history research. In this paper, we will analyze, with the help of several public records of Kenryu, Kakei era recorded in “public records of Baxian county”, how in the end of 18th-beginning of 19th century in the city of Chongqing, the most important waterway transportation trade city at the upstream of Yangtze River, when the debts and investor disputes arose concerning commerce, the conflicts and confrontations between the merchants were solved and the agreements were reached, and also what was the method local government officials used to solve those commercial lawsuits. The problem of “evidences” such as various contracts, account books and letters produced during commercial acts is especially important when considering how surveys and decisions were usually being made by judicial officers during trial processes. While investigating and making decisions concerning these evidences, an important side of the everyday life of Chinese city of that time also became evident.

賃借人の都市：近代上海住宅貸借法文化の形成と拡散

孫慧敏
中央研究院近代史研究所副研究員

［要　　旨］

近代上海（とりわけ租界地区）は都市発展の過程中で、膨大でかつ各階層にわたる賃借人が集まった。住宅の需給均衡の崩れが貸借関係の緊張化を引き起こせば、当地の住民に明確な貸借規範と権威的な裁判機能についてますます切実な要求を産出させる。本論文はまず清末民初の上海の住宅貸借習慣・契約と法規を整理することを通して、住宅貸借規範の明文化・細緻化の過程中で、賃借人が往々にして真っ先に矢面に立たされ、規範を守らされる対象となることを指摘する。その後に賃借人はいかに次第に自身が住宅市場と規範場中で二重に弱い立場にいるかを意識し、ならびに法律規章を改訂することを勝ち取り、自身の権益を保護するかを議論する。最後に 1930 年代の上海市政府が、自身のイデオロギーおよび政治要求が駆り立てる中で、賃借人の権益を擁護する事を主とする住宅賃借法規をどのように制定・施行するのかを議論する。この大いに論争となる立法理念は、いかにその他の都市に模倣され、ひいては 1940 年代において全国に通行する法規を制定する拠り所となったのだろうか。

賃居者的城市：近代上海房屋租賃法文化的形成與擴散

孫慧敏
中研院近史所副研究員

［摘　　要］

近代上海（尤其是租界地區）在城市發展的過程中，滙聚了龐大且遍布各階層的賃居者。房屋供需失調所導致的租賃關係緊張化，則使當地居民對明確的租賃規範與權威的裁判機制產生越來越迫切的需求。本文首先透過耙梳晚清民初上海的房屋租賃習慣、契約與法規，指出在房屋租賃規範明文化、細緻化的過程中，賃居者往往首當其衝，成為被規範的對象。然後討論賃居者如何逐漸意識到自身在房屋市場與規範場域中所居的雙重弱勢地位，並開始爭取修訂法律規章，以保護自身權益。最後則討論 1930 年代的上海市政府，如何在自身的意識形態及政治需要驅使下，制定、施行以維護賃居者權益為主的房屋租賃法規。此一備受爭議的立法理念，如何被其他城市仿行，進而在 1940 年代成為制定全國通行法規的依據。

임차인의 도시 – 근대 상해 주택 대차법 문화의 형성과 확산 –

쑨 후이민 (孫慧敏)
중앙연구원 근대사연구소 부연구원

［요　　지］

근대 샹하이 (上海: 이하 상해로 표기, 특히 조계지구)에는 도시 발전 과정 중에 방대하면서 각 계층에 걸치는 임차인들이 모여들었다. 주택 수급 균형의 붕괴가 임차 관계의 긴장화를 불러일으키면, 그 땅의 주민은 명확한 임차 규범과 권위적인 재판 기능에 대해 더욱더 절실한 요구를 낳았다. 본고는 먼저 청말민초 (清末民初) 상해의 주택임차습관・계약과 법칙을 정리하는 것을 통해 주택 임차 규범의 명문화・세부화의 과정 속에서 임차인이 종종 최전방으로 밀려나 규범을 지킬 수 밖에 없는 대상이 되는 것을 지적할 것이다. 다음으로 임차인이 어떻게 점차 자신이 주택시장과 규범적 장 내에서 2 중으로 약한 입장에 있는가를 깨달았는지, 또한 어떻게 법률 규장 (規章)의 개정을 자기 힘으로 획득하여 권익을 보호했는지를 논의하겠다. 마지막으로 1930 년대의 상해 시 정부가 정부 이데올로기 및 정치의 격렬한 요구 속에서 임차인의 권익을 비호하는 내용을 주로 하는 주택임차법규를 어떻게 제정・시행했는지를 논의하겠다. 큰 논쟁이 된 이러한 입법이념이 어떻게 여타 도시에 모방되어, 나아가서는 1940 년대에 전국에 통용되는 법규를 제정하는 근거가 되었던 것일까.

The city of tenants: Formation and spread of the legislation culture of housing renting in modern Shanghai

Sun Huei-min

Abstract

In the process of development of modern Shanghai (especially its concession part), a vast number of tenants spreading across all classes has accumulated. When the disruption of the equilibrium in the demand and supply of housing brings a tension in hiring and renting, a pressing need among citizens to introduce norms for renting and a powerful juridical function is produced. In this paper, I firstly outline the rental customs or agreements and legislation in the late Qing, early Republic of China times Shanghai and argue that in the processes of stipulation and detailed description of the housing rental norms, the tenants often became the target of attacks and object that has to be protected by the norms. I further discuss how the tenants later realized their dual weak position in the housing market and in terms of norms and how they succeeded in amending the laws and ordinances to protect their rights and interests. Finally, I discuss how the Shanghai government in the 1930s, driven by its own ideology and political needs, enacted and enforced laws and regulations of the housing renting that principally involved protection of the rights and interests of the tenants. How this disputable legislative idea became model for other cities and in extension formed foundation for passing nationwide regulations in the 1940s?

＜日本語＞

朝鮮時代における都市概念と都市の位階

高東煥

現在までの朝鮮時代史研究では居住人口5千人（1千戸）を基準に都市部と農村部を区分している。これに従えば、朝鮮時代には約50ヶ所の都市があったことが把握できる。しかし人口規模のみで都市を規定することはできないし、都市は人口と職業、機能から農村とは明らかに区別される空間である。そのような特徴をもつ朝鮮時代の都市空間として、中央では京都である漢陽、地方では州府郡県の所在地である邑内や手工業中心地の店村、そして商業中心地の浦口などが挙げられる。こうした空間は非農業地帯として政治や経済、行政や軍事、手工業、商業などの中心地であった。

約330ヶ所に達していた朝鮮時代の郡県組織は牧民官の品階によって州府郡県に分けられ、各々異なる位相をもっていた。なかでも従3品の都護府使以上が統治する州と府は現在そのほとんどが市以上の行政区域となっている。このように都市が行政中心地を基に発展して、都市の位相も朝鮮時代における行政組織の位階を反映する点は韓国都市史の重要な特徴である。行政位階に沿った都市化の展開は朝鮮時代の普遍的な傾向であったが、義州府の州内面、東萊の釜山面、安城徳原府の元山村、恩津県の江鏡のように商業中心地が人口2～5千名の都市に成長する場合もあった。

都市位階の頂点に立っていたのは京都である漢陽であった。人口も一番多く、18世紀後半の統計上人口は19万人であったが実際は30万人を上回っていた。その人口は漢陽以下の14位までの都市人口を全部合わせたものより多かった。このように都市人口において漢陽が占める割合は圧倒的であった。18世紀以後、漢陽には都市人としての自覚をもった階層が登場した。彼らは中間階層の閭巷人で、兩班の士大夫層とは異なる気質をもち、儒教的な綱常名分より経済活動や人間本姓を肯定することで新しい都市文化の形成を担っていった。

朝鲜时代的城市概念和城市层级

高东焕

迄今为止的朝鲜时代史研究以居住人口5千人（1千户）为基准，区分为城市部和农村部。依此可以确定朝鲜时代约有50座城市。不过，城市不是仅仅依靠人口规模能够划定的，城市是在人口和职业、功能上明显有别于农村的空间。作为拥有这些特征的朝鲜时代的城市空间，在中央有京师汉阳，在地方则可以举出州府郡县治所的邑内和手工业中心的店村，以及商业中心的浦口等。这样的空间作为非农业地带成为政治经济、行政军事、手工业和商业等中心地。

约有330个朝鲜时代的郡县组织，根据地方官的品级分为州府郡县，各自具有不同的层级。其中从3品的都护府使以上所统治的州和府，现在几乎全都成为市以上的行政区域。像这样以行政中心为基础来发展城市，城市层级也反映出朝鲜时代行政组织的品级，这一点是韩国城市史的重要特征。按照行政品级开展的城市化，是朝鲜时代的普遍倾向。但是，也有像义州府州内面、东莱釜山面、安城德原府元山村和恩津县江镜这样的商业中心，成长为人口2～5千名的城市。

位于城市层级的顶点的，是京师汉阳。人口最多，根据18世纪后半的统计，人口达19万人，而实际上超过了30万人。其人口比汉阳以下直至第14位为止的城市人口总和还要多。在城市人口方面，汉阳占据了绝大多数的比重。18世纪之后，汉阳出现了以城市人自居的阶层。他们是中间阶层的闾巷人，与两班士大夫阶层有着不同的气质，相对于儒教的纲常名分，他们更肯定经济活动和人的本性，肩负着城市新文化的形成。

朝鮮時代 都市 概念과 都市의 位階

高東煥

그간 朝鮮時代史 研究에서는 居住人口 5千名(1千戶)을 基準으로 都市部와 農村部를 區分하였다. 이에 따르면 朝鮮時代에는 50여개의 都市가 있었던 것으로 把握된다. 그러나 人口規模만을 가지고 都市를 規定할 수는 없다. 都市는 人口와 職業, 機能에서 農村과는 確然한 差異를 보이는 空間이다. 이러한 特性을 지닌 朝鮮時代의 都市空間은 中央에서는 京都인 漢陽, 地方에서는 州府郡縣의 所在地인 邑內, 手工業中心地인 店村, 商業中心地인 浦口 등을 꼽을 수 있다. 이들 空間은 非農業地帶로서 政治와 經濟, 行政과 軍事, 手工業, 商業의 중심지였다.

330여개에 달했던 朝鮮時代 郡縣組織은 牧民官의 品階에 따라 州府郡縣으로 位相을 달리하였다. 이중에서 從3品 都護府使 以上이 統治하던 州와 府는 오늘날 大部分 市 以上의 行政區域이 되었다. 이처럼 都市가 行政中心地를 바탕으로 發展했으며, 都市의 位階도 朝鮮時代 行政組織의 位階를 反映한다는 점은 韓國都市史의 重要한 特徵이다. 行政位階에 따른 都市化의 進展이 朝鮮時代 普遍的 趨勢이긴 했지만, 義州府 州內面, 東萊 釜山面, 安城, 德原府 元山村, 恩津縣 江鏡과 같이 상업중심지가 人口 2千~5千名의 도시로 성장하는 경우도 있었다.

이러한 都市位階의 最頂点에 京都인 漢陽이 자리했다. 人口도 가장 많았다. 18세기 後半 統計上 人口는 19萬名이었지만, 實際 人口는 30萬名을 上廻하였다. 漢陽의 都市人口는 漢陽以下 14位 都市까지를 모두 合한 人口數보다 많았다. 이처럼 都市人口比重에서 漢陽이 차지하는 比重은 壓倒的이었다. 18세기 이후 漢陽에서는 都市人으로서의 自覺을 지닌 階層이 出現하였다. 이들은 中間階層인 閭巷人으로서 兩班 士大夫層과는 氣質이 달랐다. 이들은 儒敎的 綱常名分보다는 經濟活動과 人間本性을 肯定함으로써 새로운 都市文化를 형성해 나갔다.

The urban concept and order in Joseon dynasty

Ko Tong-hwan

Research into Joseon dynasty history shows that urban and rural areas were classified according to the criterion of five thousand population (one thousand houses) and following this research, we are able to ascertain that there were fifty cities in the Joseon dynasty. However, cities can not be determined only by their population size. Cities should be clearly distinguished from rural areas by their population, occupation and function. Those characteristics can be observed in the urban spaces of Joseon dynasty such as Hanyang in Seoul in central areas, 邑內 which was the seat of 州府道県, Jeomchon which was a handicraft manufacturing industrial metropolis in provincial areas and the commercial metropolis 浦口(Pogu?). These spaces, as a non-agricultural region, were the center of politics, economy, administration, military, handicraft manufacturing and commercial.

Some three hundred and thirty county organizations in Joseon dynasty were classified due to the classes of prefectural governors into 州府道県 and each of them differed in phase. Almost all were ruled over by an officer above the rank of a protectorate general officer, the associated third grade rank, becoming administrative divisions larger than a city today. Cities developed according to the capital of administration and the phase of the city reflected an order of administrative organization during Joseon dynasty. This is one of the important characteristics of Korean urban history. These types of development in urbanization following the administrative order was a universal tendency in the Joseon dynasty but sometimes commercial centered regions developed into cities with a population of two to five thousand such as 義州府州内面, 東萊釜山面, 安城徳原府元山村 and 恩津県江鏡.

The summit of this urban order was Hanyang in Seoul. The city had the largest population and, according to the statistics in late 18th century, there were one hundred nineteen thousand people but in fact there were over three hundred thousand people. This population is larger than the sum of all the population of cities from the second largest to the fourteenth largest. This shows how Hanyang dominated the urban population. After the 18th century, stratum of people with high consciousness as an urbanite appeared in Hanyang. They were middle class 閭巷人 with a different temperament from those of yangban who were part of the sadaebu class. They took a part in the creation of urban culture by affirming the human nature and the economic activities rather than the confucian 綱常名分.

清末新政と地方商権意識の萌芽——蘇州醤業界の「納税拒否（抗捐）」を中心に

徐茂明
（上海師範大学人文与伝播学院）

要　旨

1906～1908 年に蘇州醤業界で発生した所謂「納税拒否（抗捐）」事件の原因は、直接的には清朝政府が「光緒新政」を推進し経費を調達しようとしたことによる。「醤缸捐」の徴収方法と金額をめぐり、蘇州醤業界の董事・蘇州商会と清朝商部・江蘇省の府・県といった各地方政治機関、および浙江塩運司の間で２年間にわたり論争が展開された。この「抗捐」事件では、実際に蘇州醤業界を取り仕切っていた潘氏一族が、その幅広い政治的資源を利用して業界の利益を旗印に、また家族の利益を目標に、「光緒新政」の理論を根拠にして、平和的な反論を手段として、国家の権力機構と渡りあった。この合法的な「抗捐」事件を通じて、政治変動の時期における、伝統的な紳士・商人階層の政治的観念と権利意識が、如何に新旧混在した情況から緩やかに発展したのかを判明できる。同時に、こうした変化こそが、清末民初期の思想界にさらに大きな突然の変化を醸成していた。

清末新政与地方商权意识的萌发—以苏州酱业“抗捐”为中心

徐茂明
（上海师范大学人文与传播学院）

内容提要：1906—1908 年苏州酱业发生了所谓的“抗捐”事件，事件之起因，直接导源于政府为推行“新政”而筹集经费所致。围绕酱缸捐的征收方式与数额，苏州酱业董事、苏州商会与朝廷商部、江苏省府县各级地方政府机构、以及浙江盐运司之间展开了长达两年的辩论。在这场“抗捐”事件中，实际操纵苏州酱业的潘氏家族，利用其广泛的政治资源，以行业利益为旗帜，以家族利益为目标，以新政理论为依据，以和平抗辩为手段，与国家权力机构周旋。通过这场合法的“抗捐”事件，人们可以看到政治变动时期，传统绅商阶层的政治观念与权利意识如何在新旧交织中缓慢地发展，也正是这种变化，酝酿着清末民初思想界更大的突变。

청말신정과 지방 상권의식의 맹아 – 쑤저우 장 업계의「납세거부(抗捐)」를 중심으로 –

쉬 마오밍（徐茂明）
(상해사범대학 인문여전파학원)

요　지

1906~1908 년 쑤저우（蘇州）장 업계에서 발생한 이른바「납세거부(抗捐)」사건의 원인은 직접적으로는 청조정부가「광서신정_光緒新政」을 추진하여 경비를 조달하려 했던 점에서 찾을 수 있다.「醬缸捐: 장세」의 징수 방법과 금액을 둘러싸고 쑤저우 장 업계의 임원·쑤저우 상회와 청조 상부(商部)·장쑤성 부/현 등 각 기방정치기관 및 저장(浙江) 염운사 (塩運司) 사이에 2 년간에 걸친 논쟁이 전개되었다. 이 납세거부 사건에서는 실제로 쑤저우 장 업계를 이끌고 있던 판 (潘)씨 일족이 폭넓은 정치적 자원을 이용하여, 업계의 이익과 가족의 이익을 기치로 내걸고 「광서신정」의 이론을 근거로 평화적인 반론 수단으로 국가 권력기구와 논쟁했다. 이 합법적인 납세거부 사건을 통하여 정치 변동의 시기에 전통적인 신사 (紳士)・상인계급의 정치관념과 권리의식이 어떻게 신구가 혼재하는 상황에서 유연하게 발전했는지를 판명할 수 있다. 동시에, 이러한 변화야말로 청말민초기 (清末民初期)의 사상계에 일어난 더 크고 급작스러운 변화의 기초를 배양하는 것이었다.

New government during the end of Qing dynasty and sprouts of consciousness concerning local commercial rights: focusing on “refusal of tax payment (kang juan)” of soy sauce industry of Suzhou

Xu Maoming
(Shanghai Normal University, Department of Humanities and Media)

Abstract

The direct reason for so-called “refusal of tax payment (kang juan)” accident which occurred in 1906-1908 in soy sauce industry was that the Qing dynasty government had been promoting the “New Guangxu government” and tried to get some finances (for that purpose). There was a wide discourse concerning the collection method of “donations from miso pot (jiang gang juan)” and the sum of money between political institutions of different regions such as members of board of directors of soy sauce industry, Suzhou trading companies, Commerce Department of Qing dynasty and government as well as county office of Jiangsu, and Zhejiang salt carriers. During this “kang juan” accident, the representatives of Han clan that in fact were managing the soy sauce industry in Suzhou, by using their wide political resources, under the slogan of the interests of the industry and aiming at pursuing the interests of the clan, made the “New Guangxu government” the basis of their theory, used peaceful argument as their means, and had debates with authority structures of the country. By taking a look at this legitimate “kang juan” accident, we can understand how the political ideas and the consciousness concerning power of traditional gentlemen/merchant classes has gradually developed, in the time of political changes, from the situation where the mixture of things new and old could be observed. At the same time, it were exactly such changes that brought great and sudden changes to the thought world during the end of Qing, early Republic of China.

「政協」による近代上海史の構築――文史資料工作を中心に

林美莉（中央研究院近代史研究所副研究員）

要　旨

本稿は、上海市档案館が保存している政協档案、とくに 1959 年から 1966 年までの会議記録と工作報告を利用して、1960 年代に上海文史資料工作に参加した徐鑄成と潘序倫らの日記と回顧資料をあわせ、中国共産党が全国政協による「文史資料研究委員会」設立を期に、政協委員とその関連する社会各界の知名人を動員し、彼ら自身の体験や経験を執筆させた史料を検討し、それにより統一戦線効果の政治作用を明らかにするものである。

上海地区文史資料の主要な責任者は、いずれも民主党派出身であった。彼らは上海の特徴を堅持して、商工業生活および文化・教育の発展を主軸とした文史資料収集の計画を定めた。また、自ら原稿を執筆したり旧知に執筆を依頼したりして、全国屈指の草稿を提供し、今日における上海文史知識の伝承の基礎を確立した。

本稿で注目するのは、政協主導の下に行われた文史資料工作が、国民政府統治期の反動的性質を強調するものになったことである。「旧時代がいかに人を鬼にさせ、新たな社会がまたいかに鬼を人に変えたのか」は、当時、文史工作を推し進める高らかなスローガンとなり、原稿執筆者には人民に新旧の時代対比を理解させることを目標とすることが求められた。しかし、この要求は執筆者に心理的圧力をかけることになった。ある者は原稿を撤回し、またある者は時が過ぎ情況が変化した後に従前の原稿を書き改めたりしたが、これらはすべて文史資料の実際の機能に複雑な影響をもたらしたのである。

「政協」對近代上海歷史的建構――以文史資料工作為中心

林美莉（中央研究院近代史研究所副研究員）

摘要

本文利用上海市檔案館保存的政協檔案，特別是從 1959 年至 1966 年間的會議紀錄與工作報告，配合在 1960 年代曾經參與上海文史資料工作的徐鑄成與潘序倫等人的日記與回憶資料，檢視中國共產黨透過全國政協設立「文史資料研究委員會」的機會，動員政協委員與其所聯繫的社會各界人士撰寫親身經歷史料，藉以達到統戰效果的政治作用。

上海地區文史資料的主要負責成員，均來自民主黨派。他們堅持上海特色，擬出以工商生活與文教發展為主軸的文史資料收集方案，並且經由親自撰稿或邀請舊識，提供全國首屈一指的文稿，奠定了今日上海文史知識的傳承基礎。

本文發現，政協主導下的文史資料工作，強調在國民政府統治時代的反動性質。「舊時代怎麼變人為鬼，新社會又怎麼變鬼作人。」成為當年推展文史工作的響亮口號，要求撰稿者做到讓人民理解新舊時代對比的目標。然而，這個要求對撰稿者形成心理壓力，有人採取撤稿退卻，有人在事過境遷之後改寫舊稿，均為文史資料的實際作用帶來複雜的影響。

「정협」에 의한 근대 상해사의 구축 - 문사자료공작을 중심으로 -

린 메이리 (중앙연구원 근대사연구소 부연구원)

요　지

본고는 샹하이 (上海, 이하 상해로 표기)시 당안관이 보존하고 있는 정협 (政協: 중국인민정치협상회의), 특히 1959 년부터 1966 년까지의 회의 기록과 공작(工作) 보고를 이용하여, 1960 년대에 상해 문사사료 공작에 참가한 쉬주청 (徐鑄成)과 판쉬룬 (潘序倫)의 일기 및 회고 자료와 함께, 중국공산당이 전국 정협에 의한 「문사자료연구위원회_ 文史資料研究委員会」설립을 계기로 정협 위원과 그에 관련된 사회 각계의 유명인들을 동원해서 그들 자신의 체험 및 경험을 집필하게 한 사료를 검토하였다. 이를 통해 통일전선 효과의 정치작용을 밝히고자 한다.

상해지구 문사자료의 주요한 책임자는 모두 민주당파 출신이었다. 그들은 상해의 특징을 견지하여 상공업 생활 및 문화・교육 발전을 주축으로 한 문사자료 수집계획을 세웠다. 또한 스스로 원고를 집필하거나 지인들에게 집필을 의뢰하는 등 전국 굴지의 초고를 제공하여 현재의 상해 문사 지식 전승의 기초를 확립했다.

본고에서 주목하는 것은 정협 주도하에 진행되었던 문사자료 공작이 국민정부 통치기의 반동적 성격을 강조하는 작업이 되었다는 점이다. 「구시대가 어떻게 사람들을 유령으로 만들고, 새로운 사회 또한 어떻게 유령을 사람으로 바꾸었는가」는 당시 문사공작을 추진하는 드높은 슬로건이 되어 원고 집필자들에게는 인민들로 하여금 신구의 시대 대비를 이해시키는 것이 목표로서 요구되었다. 하지만 이러한 요구는 집필자에게 심리적 압박을 가하는 것이 되었다. 어떤 사람은 원고를 철회하기도 하고, 또 어떤 사람은 시대 상황이 변화한 후에 종전의 원고를 고쳐 쓰기도 했는데, 이러한 사정이 모두 문사자료의 실제적인 기능에 복잡한 영향을 미쳤던 것이다.

Construction of the modern Shanghai history by the “Political Consultative”: focusing on the making of cultural and historical data

Lin May-li

Abstract

In this paper, I use Chinese public records of the People’s Political Consultative Conference, specifically the records of meetings between years 1959 and 1966 and construction reports, with the diaries and dismissal materials of 徐鑄成 Xu Zhucheng and 潘序倫　Pan Xulun who participated in the making of the Shanghai’s cultural and historical data, experiences and as well as accounts on experiences of the Political Consultative members and related well-known persons from different spheres who were mobilized in times of constituting the Committee of Cultural and Historical Data by the Communist party through the Political Consultative. Considering these documents, I aim to unveil the political effect of the overall battle strategy.

The representatives of the Shanghai’s cultural and historical data committee were all from the democratic wing. They maintained firmly the characteristics of Shanghai and decided on plan to collect cultural and historical data focused on the development of commercial and industrial life as well as culture and education. Moreover, they contributed by their writings, asked for contributions their old friends, become national leaders in providing manuscripts and formed the bases of the contemporary knowledge on Shanghai’s cultural and historical data.

I this paper I focus on the aspect of making the cultural and historical data committee under the lead of the Political Consultative emphasizing reactionary nature in the times under the rule of the People’s government. “How the old times turned people into demons and how the new society changes demons into people” became a loudly slogan in the making of cultural and historical data, and understanding the contrasting nature between the old and new times became a goal demanded from the contributors of manuscripts. However, such a demand became a psychological burden for the authors. One of them withdrew his manuscript, other changed his former manuscript after some time passed and conditions have changed, but these all had a complex effect on the actual function of the cultural and historical data.

前近代軍事都市から近代植民都市への変化-慶南統營の事例を中心に-

車喆旭（釜山大學校 韓國民族文化硏究所 助教授）

本研究は前近代における朝鮮の水軍を司る統制營の位置した軍事都市の経験が近代以後にどのような関連性で変っていくのかに注目する。統營の軍事都市としての期間は 1604 年から 1895 年までである。重要な観点は統營が軍事都市としての解体以後、既存の軍事都市を中心にしていた人々と新しく統營へ移住してくる日本人が伝統文化と新しい近代文化を巡っておこす葛藤と受容のメカニズムである。このようなことを分析するために次に注目する。一番目に前近代軍事都市であった統營が近代都市に変化するときどのように解体していくのかを都市空間と構成員を対象にして検討する。特に、軍事都市と関連した職業軍人や軍需品の生産職人が近代化過程で選択する生存方式に焦点を置く。二番目に 1900 年頃移住してくる日本人が統營に定着して近代都市に作り上げる過程で伝統文化を受容する方式を分析する。朝鮮に移住してきた日本人が作り上げる近代都市のパタンは普遍的でありうるが、それぞれの地域なりの独特な対応方法が潜在する可能性があると考えられるためである。特に軍事都市で軍需品の生産職人が作った扇や螺鈿漆器などは朝鮮人と日本人が共同努力で統營の文化産業に成長するようになる。三番目は日本人が統營の過去をどのように受け取ったのかである。統營は文祿の役で日本軍が敗北した所である。しかし、ここは朝鮮の中で勝利した戦闘地域の記念事業とは違ってむしろ李舜臣と関連した遺跡地を観光商品化している。このような内容は統營で暮す日本人を民族的な観点ではなくローカルな観点から眺めさせる。以上の内容が本研究の重要な論点である。

从前近代军事都市到近代殖民都市的变化—以庆南统营为例—

车喆旭（釜山大学校 韩国民族文化研究所 助教授）

本研究着力于厘清前近代统辖朝鲜水军的统制营所在的军事都市的经验对其近代之后发展的影响。统营成为军事都市是在1604年到1895年之间。在作为军事都市的统营解体之后，有一种分析框架是，重视分析原先就生活在此军事都市的人和新进入统营的日本移民，在围绕传统文化和新的近代文化上产生的冲突和融合。首先，我们来探讨在作为前近代军事都市的统营在解体，并转变为近代都市之际，其中都市空间和成员构成所产生的变化。特别是聚焦在这些和军事都市密切相关的职业军人以及生产军需用品的手艺人身上，关注他们在统营的近代化过程中所做出的生存选择。其次，我们再来分析1900年前后移民过来的日本人在统营定居之后，在构筑起新的近代都市之时吸收传统文化的方式。这是由于，我们虽然可以设想那些日本移民所建造的近代都市大同小异，但是必须留意其中是否存有在每个地方独一无二的特殊对应方式。特别是在此之后，这个军事都市中生产军需品的手艺人所制作的扇子和螺钿漆器等物品，可以被看作是朝鲜人和日本人共同致力于推进统营文化产业的结果。第三，是日本人到底是如何看待统营的过去这个问题。统营是日本军队在文禄之役时候的战败地。但是，这里并没有朝着纪念朝鲜战斗胜利的纪念事业方向发展，而是成为了商品化了的和李舜臣有关的古迹观光之地。我们试图用在地的观点来看生活于统营的日本人，而非用民族的观点。以上就是本研究将着重论述的内容。

전근대 군사도시에서 근대 식민도시로의 변화 - 경남 통영의 사례를 중심으로 -

차철욱 (부산대학교 한국민족문화연구소 조교수)

본 연구는 전근대 조선의 수군을 관장하는 통제영이 위치한 군사도시의 경험이 근대 이후에 어떠한 관련성으로 변화해가는가에 주목한다. 통영의 군사도시로서의 기간은 1604 년부터 1895 년까지이다. 중요한 관점은 통영이 군사도시로서의 해체 이후, 기존의 군사도시를 중심으로 했던 사람들과 새롭게 통영에 이주해 온 일본인들이 전통문화와 새로운 근대문화를 둘러싸고 벌이는 갈등과 수용의 메커니즘이다. 이러한 점을 분석하기 위해 다음을 주목할 것이다. 먼저 전근대 군사도시였던 통영이 근대도시로 변화하면서 어떻게 해체되는가를 도시공간과 구성원을 대상으로 검토하겠다. 특히, 군사도시와 관련된 직업군인 및 군수품의 생산직인들이 근대화 과정에서 선택하는 생존방식에 초점을 둘 것이다. 두 번째로 1900 년경 이주해 오는 일본인이 통영에 정착하여 근대도시를 만들어내는 과정에서 전통문화를 수용하는 방식을 분석한다. 조선으로 이주한 일본인들이 만들어내는 근대도시 패턴은 보편적일 수 있으나 각각의 지역 고유의 독자적인 대응 방법이 잠재할 가능성이 있다고 생각되기 때문이다. 특히 군사도시에서 군수품 생산직인이 만든 부채나 나전칠기 등은 조선인과 일본인의 공동 노력으로 통영의 문화산업으로 성장하게 된다. 세 번째로 일본인이 통영의 과거를 어떻게 파악했는가이다. 통영은 임진왜란 때 일본군이 패한 곳이다. 하지만 이곳은 조선 내에서 승리한 전투 지역의 기념사업과 달리 오히려 이순신과 관련된 유적지를 관광상품화하고 있다. 이러한 내용은 통영에서 거주하는 일본인을 민족적인 관점에서가 아니라 로컬의 관점에서 조망하게 한다. 이상의 내용이 본 연구의 중요한 논점이다.

The Transition of Premodern Military Cities to Modern Colonial Cities: The Case of Tongyeong

Cha Chul-Wook

This research explores the manner in which the Korean city Tongyeong changed in the modern era following its experience as a pre-modern naval city. Tongyeong functioned as a military city from 1604 to 1895. Most importantly, this research focuses on the conflict, as well as the mechanism of reception, between traditional culture and modern culture, brought about by urbanites from previously established military cities and Japanese migrants who flocked to Tongyeong after it was dissolved as a military city. To do so, the following three topics are addressed in detail. Foremost, this report discusses how Tongyeong developed from a pre-modern military city to a modern city from the perspective of the city atmosphere and its members, specifically focusing on the lifestyles career soldiers and munitions manufacturers chose to cope with the transition to modernism. Further, this report analyzes the process for receiving traditional culture by Japanese who migrated to Tongyeong around 1900 seeking to modernize the city. By doing so, it becomes clear that while the Japanese model of modern city-building was universal, unique methods for accepting Korean culture, varying by region, were latently possible. In military cities like Tongyeong, cultural industry advanced through the combined effort of Koreans and Japanese, especially notable in the folding fans and mother-of-pearl lacquer ware produced by former munitions workers. The third point concerns the ways in which Japanese interpreted Tongyeong's history. The Japanese army was defeated at Tongyeong during the Imjin War. However, distinct from other victorious battlegrounds in Korea, Tongyeong instead became a tourist site related to the historic remains of Yi Sun-sin. Taking this into account, it is necessary to interpret the Japanese who resided in Tongyeong from a local, rather than racial, perspective. These points comprise the main issues examined in this research.

東アジアにおける植民地都市の近代性

東京経済大学経済学部　　橋谷　弘

東アジアにおける近代都市は、植民地都市として形成されたものが少なくない。

植民地都市の一つの特徴は、自生的に形成された近代都市のような、伝統都市との連続性に乏しいことである。東アジアの植民地都市には、①伝統都市の上に重なるように形成された都市、②開港都市や工業都市のように全く新たに形成された都市、③自生的に形成された被支配者の都市と並立する形で形成された都市など、いくつかの類型がみられる。しかし共通するのは、都市の二重性（支配と被支配・富裕と貧困・外来文化と伝統文化など）、今日の発展途上国と共通するような都市の従属性（過剰都市化・都市非公式部門など）といった、植民地都市固有の特徴である。これに加えて日本の植民地都市では、支配者と被支配者の同質性や、神社や遊郭など日本の都市文化と共通する要素を持つ、独特の都市社会が形成された。いずれにしても、これらの変化には、欧米の都市などとは異なる近代のあり方が反映されている。

一方、植民地支配が近代世界システムの一側面であったのと同じく、植民地都市も東アジアの近代都市に共通してみられる性格を色濃く持っていた。とくにそれは、両大戦間期の都市文化や都市生活の中に顕著に表れていた。具体的には、デパート、ダンスホール、カフェー、アパートなどの存在である。これらの施設あるいは文化や生活は、欧米に起源をもちながら、欧米とは異質な発展を遂げていた。そして、それは植民地都市に固有のものではなく、帝国主義本国の都市である東京や、独立国の半植民地都市である上海などにも共通してみられる、いわば東アジア都市の近代から現代への移行を象徴する変化だった。

以上のような特徴に着目しながら、負の側面も含めた近代性の表れの一つとしての植民地都市の歴史について考察してみたい。

东亚殖民城市的近代性

东京经济大学经济学部　　桥谷　弘

东亚的近代城市有不少是作为殖民城市而形成的。

殖民城市的特征之一，就是它缺乏自发形成的近代城市那样的与传统城市之间的连续性。东亚的殖民城市有以下几种类型：①叠加在传统城市之上而形成的城市；②像通商口岸城市和工业城市那样全新的城市；③形式上与自发形成的被统治者城市共存等等。不过，它们具有殖民城市固有的共通特征：城市的二重性（统治和被统治、富裕和贫困、外来文化和传统文化等）以及与今天发展中国家共通的城市从属性（过度城市化、城市非正式部门等）。此外，在日本殖民地的城市中，还有着统治者和被统治者的同质性、拥有神社和妓馆等与日本城市文化共通的要素，形成了独特的城市社会。不管如何，这些变化反映出了与欧美城市不同的近代形态。

另一方面，如同殖民地统治乃近代世界体系的一个侧面，殖民城市也很明显地拥有东亚近代城市的共通特征。尤其显著地体现在两次世界大战之间的城市文化和城市生活之中。具体的说，诸如百货公司、舞厅、咖啡厅、公寓等。这些设施或文化、生活，虽起源于欧美，但又取得与欧美异质的发展。不过，这些却并非殖民城市所固有，在帝国主义本国城市东京和独立国家的半殖民地城市上海等城市，可以说这些变化象征着东亚城市从近代向现代的转变。

殖民城市作为近代性的表现之一，它也包含了负的一面。我想在着眼于上述特征的同时，对殖民城市的历史作一个考察。

동아시아 식민지도시의 근대성

하시야 히로시 (도쿄경제대학 경제학부)

동아시아의 근대도시는 식민지도시로서 형성된 것이 적지 않다.

식민지도시의 특징 중 하나는 자생적으로 형성된 근대도시가 가진, 전통도시와의 연속성이 거의 없다는 점이다. 동아시아의 식민지도시 도시를 보면 ①전통도시 상에 겹쳐지듯이 형성된 도시, ②개항도시 및 공업도시와 같이 아주 새롭게 형성된 도시, ③자생적으로 생겨난 피지배자의 도시와 병립하는 형태로 형성된 도시 등 몇 가지 유형이 존재한다. 하지만 공통되는 점은 도시의 이중성 (지배와 피지배, 부유와 빈곤, 외래문화와 전통문화 등), 오늘날의 개발도상국과 공통되는 것으로 생각되는 도시의 종속성 (과잉도시화, 도시 비공식부문 등) 등의 식민지도시 고유의 특징이다. 이에 더하여 일본의 식민지도시에서는 지배자와 피지배자의 동질성 및 신사와 유곽 등 일본의 도시문화와 공통되는 요소를 가진 독특한 도시사회가 형성되었다. 이러한 변화에는 구미 도시와는 다른 근대의 모습이 반영되어 있다.

한편, 식민지지배가 근대세계의 시스템의 한 측면이었던 것과 같이 식민지도시 또한 동아시아 근대도시에서 공통적으로 보이는 성격을 뚜렷하게 가지고 있었다. 특히 그것은 양 세계대전 시기의 도시문화 및 도시생활 속에서 현저하게 나타났다. 구체적으로는 백화점, 댄스 홀, 카페, 아파트 등의 존재이다. 이러한 시설 혹은 문화와 생활은 미국과 서유럽으로부터 온 것이면서도 미국과 서유럽과는 다른 성질의 발전을 이루고 있었다. 그리고 그것은 식민지도시에 있어서 고유한 것이 아니라 제국주의 본국 도시인 도쿄나 독립국이면서 반식민지도시인 샹하이 등에서도 공통적으로 발견되는, 말하자면 동아시아 도시의 근대에서 현대로의 이행을 상징하는 변화였다.

이상의 특징에 주의를 기울이면서, 부정적인 측면을 포함한 근대성의 표상 중 하나로 식민지도시의 역사에 대해 고찰하겠다.

Modernity in East Asian Colonies

Hashiya Hiroshi

Of today's modern East Asian cities, the number that were first established as colonial cities is considerable.

A result of their modernity, colonial cities are characterized by a lack of continuity with traditional cities. A variety of patterns can be observed amongst East Asian colonies: cities established on top of the traditional city structure; port and industrial cities that took on an entirely new form; cities established alongside native, unoccupied cities, and the like. However, these cities share common characteristics as colonial cities, such as social duality--controllers and the controlled, wealth and poverty, foreign culture and tradition--as well as the effects of subordination (excessive urbanization and unofficial city sectors), similar to cities in today's developing countries. Moreover, due to homogeneity between governors and the governed, in addition to a wealth of shared cultural aspects (shrines and red light districts, for example), Japan's colonial cities took on a particularly unique social structure. At any rate, these changes reflect a different modernity from that of Western cities.

On the other hand, in the same way that colonization represents one facet of the modern world, colonies also share marked similarities with East Asian modern cities. These similarities were most strikingly articulated in city culture and lifestyle during the World Wars, specifically in the appearance of department stores, dance halls, cafes, and apartment complexes. While these facilities and ways of life originated in Western culture, they succeeded in developing distinctly from their Western counterparts. Further, these social characteristics were not those observed in typical colonial cities, but rather shared common ground with Tokyo, the capital of imperial Japan, and ostensibly independent Hong Kong. In other words, it can be said that these changes symbolized East Asian cities' transition from modernity to the present.

By focusing on both the aforementioned characteristics as well as the adverse effects of colonization, I hope to investigate the history of East Asian colonial cities as an expression of modernity.

問題提起

井上　徹

本シンポジウムは、「東アジア都市における集団とネットワークー伝統都市から近現代都市への文化的転回ー」をテーマとしている。都市の歴史に関して豊かな研究成果を積み重ねてきた日本都市史の分野では、西洋の資本主義がアジアを覆う以前の前近代の都市を伝統都市、それ以降に資本主義の圧倒的な影響力のもとでなお伝統都市に拘束された近代都市、自己の内なる伝統を資本主義の進展度に応じて解体させていった現代都市、この三つに分類する考え方が提示されている。本シンポジウムでは、この考え方を参考枠として採用し、１９世紀を分水嶺として、それ以前の東アジア（日本、中国、朝鮮）の諸都市を伝統都市、それ以降の諸都市を近代都市、現代都市と呼んでおきたい。

本シンポジウムでは、伝統都市で培われた個性的な文化を支える各種の集団あるいは集団や個人が取り結ぶ社会関係がヨーロッパ近代によってもたらされた資本主義の影響のもとでどのように変化し、現代の都市に繋がっていったのかという素朴な問いかけをもとにテーマを設定している。論者は中国の明清時代（１４世紀半ば～２０世紀初頭）を研究の対象としてきたので、とくに伝統都市の問題を中心として、いくつかの問題を本シンポジウムで投げかけてみたいと考えている。

欧米とくにアメリカにおける研究界ではかつて、現代の自由化運動に触発されて、中国都市の「自治」をめぐる問題が議論されたことがある（ウィリアム・ロー等）。この議論は西洋の都市と対照させて、中国の都市には、近代資本主義への展開に繋がるような自治が欠如していたというウェーバーの都市論を起点として、都市の自治のあり方を議論したものであり、「公共領域」（第３領域）の問題へと発展した。こうした議論が問いかけるのは、中央政府の行政・軍事の拠点＝城郭都市（城）を骨格としてきた中国の伝統都市が中央集権国家のもとで自律的な空間をもちえたかどうかということにある。東アジアの都市を論じるに際しては、どの国や地域を扱うにしろ、一般に現代都市のルーツと認識されるところの西洋の都市の歴史との比較から始めざるをえない。比較史の視点をどのように築くかが第１の問題である。

この議論のなかで浮上した第２の問題は都市と農村との関係に関して、地理的社会的な流動性を可能にする開放的な社会を作り上げた中国では、都市と農村が境界で仕切られるのではなく、両者が渾然と一体となり、農村と都市の有機的な統一体を強めたという視点から捉えるべきであるという主張をめぐるものである（F.W.モート）。この主張からは、都市を捉えるに際して、農村との間の明快な境界より以上に、国家管理やさまざまに織りなす都市の集団・ネットワーク（商工業、地縁・血縁、宗教に関わるところ）、その創出せるところの文化の側面に目を向けるべきではないかという問題を引き出せる。

第３に、移住前線と都市化との関係である。ウェーバーはつとに王朝末期の都市に関して、少数民族（苗族）の最終的な征服が強制的な城壁都市への集住によって完結していることに注目している。少数民族が居住する辺境の地域を国家の領域に組み込むに際して、城郭都市がいかなる役割を果たしたのかという問題は、漢族の辺境への移住によって領土を拡大してきた中国社会にあってどの時代にあっても問われるものである。移住前線における都市化と国家の領土管理に城郭都市が果たした役割をトータルに捉えなければ、中国の都市の全容が見えてこないように思われるのである。

以上、欧米の議論より３点の問題を引き出してみた。本シンポジウムでは、これらの若干の問題を手がかりにして、議論を進めたいと考える。

提出问题

井上　彻

本次研讨会的主题是“东亚城市的集团与网络－－由传统城市向近现代城市的文化转向”。在城市历史研究方面硕果累累的日本城市史领域，主张将城市分为如下三种类型：①传统城市，即西方资本主义席卷亚洲之前的前近代城市；②近代城市，处于资本主义的绝对影响力之下，但仍然受到传统城市的束缚；③现代城市，相应于资本主义的进展程度，瓦解了自身内在的传统。本次研讨会采用这种思路作为参考框架，以 19 世纪为分水岭，将在此之前的东亚（日本、中国、朝鲜）各个城市称为传统城市，而将此后的各个城市分别称为近代城市和现代城市。

传统城市孕育出富有个性的文化，而支撑着这些文化的各种集团以及维系集团与个人的社会关系，在近代欧洲所带来的资本主义的影响之下，是如何发生变化，并与现代的城市产生关联的？本次研讨会基于这个单纯的疑问，设定了会议主题。我是研究中国明清时代（14 世纪中叶～20 世纪初）的，所以尤其想以传统城市问题为中心，对本次研讨会提出几个问题。

在欧美，尤其是美国学界，曾经受到现代的民主化运动启发，围绕着中国城市的“自治”问题展开过讨论（罗威廉等）。韦伯曾认为相对于西方城市而言，中国城市缺乏与近代资本主义发展相关联的自治。罗威廉等人的讨论即以韦伯的城市论为起点，探讨城市自治的状况，并发展为“公共领域”（第三领域）的问题。他们就是想弄清楚，以中央政府的政治军事据点，即城郭城市（城）为主体而形成的中国传统城市，在中央集权国家之下，究竟是否拥有自律性的空间。在探讨东亚城市的时候，无论是研究哪个国家、哪个地域，一般来说，我们都要先与现代城市之源流的西方城市历史进行比较。怎样建构比较史的视点，这是首当其冲的问题。

上述讨论中出现的第二个问题涉及城市与农村的关系，有学者主张应该从如下的视点进行探讨，认为中国是一个具有地理流动性和社会流动性的开放性社会，城市与农村并没有明确的界线，二者浑然一体，增强了农村与城市的有机统一（牟复礼）。从这个主张可以引申出一个问题，我们在研究城市的时候，与其关注城市与农村之间的明确界线，更应该关注国家管理与无所不至的城市集团和网络（涉及工商业、地缘、血缘和宗教），及其所由产生的文化层面。

第三，移民前线与城市化的关系。对于王朝末期的城市，韦伯早就注意到，通过将少数民族（苗族）强制性地聚居于城郭城市之中，以实现对他们的最终征服。将少数民族居住的边境地区编入国家领域之际，城郭城市发挥了什么样的作用？在通过汉族向边境的移民来扩张领土的中国社会，这个问题不管在哪个时代都是存在的。如果我们不对移民前线的城市化与城郭城市在国家领土管理中所起的作用进行总体研究的话，将无法看清中国城市之全貌。

以上从欧美学界的讨论尝试引申出三点问题。希望本次研讨会能以上述若干问题为线索，来进行探讨。

문제제기

이노우에 토오루

본 심포지엄은「동아시아도시의 집단과 네트워크 - 전통도시에서 현대도시로의 문화적 전환 - 」을 테마로 하였다. 도시의 역사에 관해 풍성한 연구 성과를 축적해 온 일본도시사 분야에서는 서양 자본주의가 아시아를 뒤덮기 이전의 전근대 도시를 전통도시, 그 이후에 자본주의의 압도적인 영향력 하에 있으면서 또한 전통도시에 구속된 근대도시, 본래의 내부적 전통을 자본주의의 진전과 함께 해체시켜나간 현대도시, 이렇게 3 가지로 분류하는 방법이 제시되었다. 본 심포지엄에서는 이 시각을 하나의 참고용 틀로 삼아, 19 세기를 분수령으로 그 이전의 동아시아 (일본, 중국, 조선) 도시들을 전통도시, 그 이후의 도시들을 근대도시, 현대도시라고 지칭하겠다.

본 심포지엄에서는 전통도시에서 배양된 개성적인 문화를 지탱하는 여러 종류의 집단, 혹은 집단 및 개인이 맺는 사회관계가 유럽 근대가 가져온 자본주의의 영향하에서 어떻게 변화하고, 현대도시로 이어져나갔는가라는 소박한 의문을 바탕으로 테마를 설정했다. 발표자들은 중국 명청시대 (14 세기중반~20 세기초)를 연구 대상으로 삼아왔기 때문에 특히 전통도시를 중심으로 몇 가지 질문을 본 심포지엄에서 던져보고자 한다.

구미, 특히 미국 학계에서는 이전 현대의 자유화 운동에 촉발되어 중국도시의「자치」를 둘러싼 문제가 논의되었다 (윌리엄 로 등). 이 논의는 서양 도시와 대조적으로 중국 도시에는 근대 자본주의로의 발전으로 이어지는 자치가 결여되어있었다는 베버의 도시론을 기점으로 하여 도시 자치의 형태를 논의한 것으로,「공공영역」 (제 3 영역)의 문제로 발전했다. 이러한 논의가 묻고자 한 것은 중앙정부의 행정・군사 거점=성곽도시(성)를 골격으로 발전한 중국의 전통도시가 중앙집권국가 하에서 자율적인 공간을 가질 수 있었는가에 관한 것이다. 동아시아 도시를 논할 때, 어떤 국가 혹은 지역도 마찬가지지만, 일반적으로 현대도시의 뿌리로 인식되는 서양 도시의 역사와의 비교 작업에서부터 시작하지 않을 수 없다. 비교사의 시점을 어떻게 세울 것인가가 첫 번째 질문이다.

이 논의 속에서 부상한 제 2 의 질문은 도시와 농촌과의 관계에 대해서 지리적・사회적 유동성을 가능하게 하는 개방적인 사회를 만들어낸 중국에서는 도시와 농촌이 경계에서 구분되는 것이 아니라 양자가 혼연일체가 되어, 농촌과 도시의 유기적인 통일체를 강화시켰다는 시점에서 파악해야 한다는 주장과 관련된 것이다 (F.W. 모드). 이 주장에서는 도시를 파악할 때 농촌과의 명확한 경계 이상으로 국가 관리 및 다양한 형태로 짜여진 도시의 집단・네트워크(상공업, 지연・혈연, 종교에 관련된), 이들을 창출하는 문화적 측면에 주목해야 할 것이라는 질문을 제기할 수 있다.

세 번째로, 이주전선과 도시화와의 관계이다. 베버는 일찍이 왕조 말기 도시에 관해 소수민족 (묘족_苗族)의 최종적인 정복이 강제적인 성벽도시로의 집주에 의해 완결되었다는 점에 주목했다. 소수민족이 거주하는 변경 지역을 국가 영역에 편입시킬 때, 성곽도시가 어떠한 역할을 발휘하였는가는 한족의 변경으로의 이주에 의해 영토를 확대해 온 중국사회에 있어서 어떤 시대라도 주목되는 점이다. 이주 전선의 도시화와 국가의 영토관리에서 성곽 도시가 가지는 역할을 전체적으로 파악해야 중국 도시의 전체상을 볼 수 있으리라 생각한다.

이상, 구미의 논의를 바탕으로 3 가지의 질문을 꺼내 보았다. 본 심포지엄에서는 이러한 질문들을 단서로 논의를 진행하고자 한다.

Issues for discussion

Inoue Toru

The theme of this symposium is "Groups and Networks in East Asian Cities - Cultural turn from traditional cities to modern and contemporary cities".

Great accomplishments have been achieved in the field of Japanese urban history studies. The theory presented here classifies cities into three phases.
Traditional cities which are pre-modern cities - before western capitalism covered Asia; modern cities which restrained by the concept of traditional cities yet are under overwhelming influences of capitalism; and contemporary cities where traditions have broken down as a result of the impact of capitalism.
In this symposium, we will embrace this theory as a reference and call east Asian (Japan, China and Korea) cities from pre 19th century a traditional city followed by a modern city and a contemporary city.
The theme of this symposium is set based on a simple question: whether, and how, social relationships between various groups or a group and an individual based on distinctive cultures in traditional cities altered under the influence of capitalism brought by a modernized Europe, ultimately leading to the contemporary cities of today.
I will be discussing some issues especially concerning traditional cities in this symposium since my research subject is the Ming and Qing periods in China.
In the western research field, especially in the United States, issues concerning autonomy in Chinese cities have been discussed incited by the liberation movement today (William Rowe etc.). This discussion originated from Max Weber's urban theory on an absence of autonomy leading up to the development of modern capitalism in urban China as contrasted with western cities. This discussion on the autonomy of cities developed into the issue concerning the "public sphere" (the third realm).
This discussion inquires whether traditional cities in China based on fortified cities, the bases of central government and military, were able to obtain autonomy under the centralized government.
When discussing matters concerning east Asian cities, regardless of which countries or areas, the discussion must begin with a comparison to western urban history which is prevailingly recognized to be the derivation of contemporary cities.
The first issue will be on how and where to establish the viewpoint in the history of comparison.
The second issue discussion is concerned with the relationship between cities and agricultural villages presented by F.W.Mote. An open society created in China enabled geographical and sociological fluidity. There were no boundaries between cities and agricultural villages. Both merged into one, eventuating in the intensification of organic integration between cities and agricultural villages. Through this contention, we can extract a question on whether to look into the cultural aspect of cities created through a group and a network (commerce and industry, blood and territorial relation and religion) woven across cities and/or state control rather than clear boundaries between cities and agricultural villages.
The third issue is the relationship between urbanization and migration front. Max Weber has noted from the early stage that cities in the end of the dynasty period were accomplished by the final subjection of minority groups (the Miao) and their compulsory residence in fortified cities. The issue on the function of fortified cities when including a marginal area where minority groups live into a national territory is questioned throughout any period of time in the Chinese society which has been expanding its territory by the migration of Han people to marginal areas. We need to grasp the total function of fortified cities achieved in the urbanization and the nation's territory control concerning the migration front to be able to understand the whole picture of Chinese cities.
In preceding discussion, I have pulled out three issues from western research and in this symposium, I would like to advance this discussion using these issues as leads.

問題提起

佐賀　朝

井上徹氏の問題提起の論点は、①比較史の基軸をどのように設定するか、②都市と農村の関係をどう捉えるか、③権力の拡大あるいは領土拡張と拠点都市の関係をどう考えるか、の三つである。私も、近現代大阪の都市史を研究する立場から、二つの問題を提起したい。

第一に、芸能・文化における 18〜19 世紀の変容をどう捉えるか。これを比較史的に議論していただきたい。例えば、近世後期の大坂における浄瑠璃文化のあり方は、頂点的なプロフェッショナルの芸能者による芸の裾野に、膨大なアマチュアが存在する、という問題―a 都市における文化の民衆的基盤の存在―を示唆している。また、浄瑠璃や歌舞伎の興行やその基盤のあり方は、江戸と京・大坂でも異なっており、これらの都市は相互に交流しつつも、対照的である。こうした b 国内の諸都市における文化的差異も論点となるだろう。

また、江戸・吉原（よしわら）遊廓における芸者の遊女からの分離という 18 世紀の変化は、その後の近代における遊廓社会の普及・拡大、芸者町の簇生という事態にもつながるものである。c18〜19 世紀を跨ぎ、都市と農村の両方にわたる、芸能・文化の普及と改良（近代的再編）といった問題を、東アジアレベルで比較すること、これも論点となるだろう。

＊以上の論点を考える際には、吉田伸之氏（日本近世史）が提唱した「社会=文化構造の視点」が重要である。都市史研究の立場から芸能文化の歴史的特徴を明らかにするためには、芸能文化の内容（作品論）や、その政治的性格を問題にするだけではなく、芸能を成り立たせている社会的基盤をあわせて論じることが重要である。具体的には、(1)芸能が成立する空間（場）の性格、(2)芸能の制作や興行に関わる多様な主体の存在形態と相互関係（役者や作者だけでなく、興行の運営に関わる多様な社会集団、興行場の地主、興行場が存在する地域の開発や共同組織のありようなども含む）などを明らかにし、その近代化過程での変容を論じることが必要であろう。

第二に、井上氏の論点①②③のすべてに関わって、伝統都市から近代都市あるいは現代都市への移行を、どのように具体的に把握するか、という問題がある。ここでは、近代大阪の例に触れながら、三つほどの具体的論点を提示したい。

まず d 租界・居留地の建設や西欧化が、既存の伝統都市にどのような変化を与えたか、という問題がある。大阪でも、開港に伴い、1868 年に川口居留地が開設されるが、ひじょうに小規模であり、大阪が貿易港として不適当であったため、この居留地は、おおむね教育・文化の拠点にその役割を限定し、大阪全体への影響力は軽微にとどまった。一方、中国の上海や朝鮮の植民地都市では、既存の伝統都市と併存しつつ、あるいはそれを圧倒する形で、租界・居留地を核とした近代都市が建設され、その影響はかなり大きかったように見える。しかし、上海の租界には多くの中国人が流入し、租界内部では、逆に西欧型近代都市の伝統的な「住み替え」もなされたことが予想される。一方、横浜や神戸に比べて居留地の影響が小さかった大阪でも、西欧近代的な都市空間の形成・拡大は、近世武家地の跡地利用を中心に進められた。したがって、西欧化や植民地化・半植民地化による近代都市空間の形成は、その表面的な把握にとどまらず、内部の社会=空間構造のありようにまで分け入る形で把握する必要がある。

次に、e 都市空間の拡張と社会の都市化が、どのように進んだか、という問題がある。都市の近代化は、市街地の空間的拡大（スプロール化）と不可分な形で進んだから、井上氏の述べた都市・農村の渾然一体化は、中国に限定されない。問題は、こうした空間的拡大に伴って、自治や権力の領域、人・物・情報の移動・流通関係、あるいは都市・農村双方の社会=空間構造が、どのように変化したか、を具体的に考えることであろう。

＊論点 d と e の両方に関わる点として重要なのは、租界や居留地を含む開港場都市の成立によって生じた生産・流通をめぐる諸関係や市場（いちば）・市場圏（しじょうけん）の変化という問題であろう。開港に伴う流通の再編は、横浜や神戸だけでなく、貿易港としては出遅れた大阪でも生じている。綿作や綿糸・綿織物業に生じた変化は、その代表的な一つであろう。こうした問題を分析する際には、吉澤誠一郎氏の昨日の記念講演において提起された視角が重要である。すなわち、開港場と後背地の関係を、具体的な商品に即して事例分析を重ねる形で進めていく、という視角である。これに加えて、日本近世の流通社会史研究で進められている方法が重要であろう。具体的には、生産・流通に関わる社会集団の存在形態、売りと買いの実態、市場などの空間をめぐる所有関係などを分析することで、モノの流通をめぐって形成されている社会的諸関係の立体的な復元（再構成）していく、という方法である。

最後に、以上の点すべてと関わるが、f 近代都市の中の伝統的な小社会（共同体的近隣組織）の残存と再編がどのように進んだか、という問題がある。この点に関わって、日本近代都市史では、町内会あるいは町内社会の実態が注目されてきた。日本の近代社会では、おしなべて近世社会の細胞であった町（ちょう）と村（むら）が、明治時代以降も根強く残存し、高度成長で本格的に解体するまで、その社会的単位としての意味を喪失しなかった点が特徴的である。しかし、これにも差異があり、農村の村よりも都市の町のほうが解体は早かったし、同じ都市でも違っていた。例えば、大阪と京都はかなり対照的である。この問題は、朝鮮の洞と日本の町の比較、中国の近代都市社会の内部構造研究などといった研究課題ともつながる。ぜひ、この点も比較史的に議論していただきたい。

＊「大阪と京都が対照的である」とした点について補足する。大阪では、1868 年の明治維新を経て、行政的なレベルで町（ちょう）の解体が進んだ。すなわち、近世以来置かれていた町の年寄（としより）が置かれなくなり、人別（戸籍）の管理も町ではなく 10 町ほどで組織された町組（ちょうぐみ）や区役所が担うようになる。それでも、1880 年代までは、都心部などでは近世以来の町の集団的まとまり（これは地主＝不動産所有者としての結合関係を根幹としていた）の存在が確認できる。しかし、1890 年代になると、周辺部では、従来の町に代わって、町内の有志者が組織した任意団体が、複数、並立する状況が生じ、その中の特定の団体が事実上、町内を代表するような場合もあった。他方、京都でも、明治維新後、町は行政上の公的な役割を失い、その地位は動揺した時期もあったが、1897 年に京都市が町ごとに「公同組合」を組織するよう指示したこともあって、それを外皮としながら近世以来の町が根強く存続していく。京都では、1920〜30 年代に至っても、なお地主たちだけが参加できる町の寄合（よりあい）が多くの地域に存在し、祭礼や公的な行事の運営が継続していく。

昨日の宮嶋博史氏の記念講演では、朝鮮半島の戸籍のありようが明らかにされたが、日本近世においては、人別帳（にんべつちょう）と呼ばれる戸籍を第一次的に作成する主体が町であったことをふまえると、朝鮮の都市においては、どのような単位で戸籍が作成され、また戸籍を第一次的に作成する主体が誰であったのか（特に「洞」との関係）、またそれは近代化・植民地化の過程でどう変化するのか、などが問題となるであろう。

以上、第一、第二の点にわたり、a〜f の 6 つの具体的論点を提起し、いくつかの点について補足・追加をした。活発な討論をお願いしたい。

参考文献

吉田伸之『身分的周縁と社会＝文化構造』（部落問題研究所、2003 年）
吉田伸之『伝統都市・江戸』（東京大学出版会、2012 年）
佐賀朝『近代大阪の都市社会構造』（日本経済評論社、2007 年）

提出问题

佐贺　朝

井上彻教授提出的问题有以下三个论点：①如何设定比较史的基础；②如何看待城市与农村的关系；③如何思考权利扩张或领土扩张与据点城市的关系。我也想从近现代大阪城市史研究的角度，提出两个问题。

第一个问题，如何看待文娱·文化在 18～19 世纪的变容。我想将其放在比较史的角度进行探讨。譬如近世后期大坂的净瑠璃文化，艺术的顶峰是一些专业艺人，而在其下面则存在着庞大的业余爱好者，从这个问题可以得到启发：a.城市文化存在着民众基础。此外，就净瑠璃和歌舞伎的演出及其基础来看，江户与京都和大坂的情况也各不相同，这些城市虽然相互交流，但也形成对比。因而，b.国内各个城市的文化差异也可以成为讨论对象。

此外，江户吉原（Yoshiwara）游廓（烟花巷）的艺妓从娼妓中分离出来，18 世纪的这种变化还与后来近代游廓社会的普及与扩大，以及艺妓町遍地丛生的状况息息相关。c.跨越 18～19 世纪，城市与农村双方的文娱·文化的普及与改良（近代的重组）问题，也可以放在东亚层面进行比较。

第二个问题与井上教授的三个论点相关，就是如何对传统城市向近代城市或现代城市的转向进行具体的把握。我想在此以近代大阪为例，提出三个具体的论点。

首先，d.租界·居留地的建设与欧化，对原有的传统城市带来了什么样的变化？随着通商口岸的开放，大阪在 1868 年也开设了川口居留地，由于规模非常小，与大阪作为贸易港的地位很不相称，所以，该居留地大体上仅限于发挥教育·文化据点的作用，对大阪整体的影响比较轻微。但是，中国上海和朝鲜的殖民地城市，在形式上与原有的传统城市并驾齐驱，或凌驾其上，以租界·居留地为核心的近代城市得到了创建，其影响非常大。然而，由于许多中国人涌进上海租界，在租界内部，亦可反过来视为向西欧型近代城市的传统“迁居”。不过，即使在大阪，虽然与横浜和神户相比，居留地的影响较小，但西欧近代化城市空间的形成和扩大，以近世武家旧宅地的重新利用为中心，得到了发展。因此，因欧化与殖民地化、半殖民地化而导致的近代城市空间的形成，不能仅仅停留在表面上的把握，必须深入到内部社会（空间结构）的样态进行把握。

其次，e.城市空间的扩张与社会的城市化是如何进行的？由于城市的近代化在形式上与市区的空间扩张（延伸化）密切相关，所以，井上教授所述城市与农村的浑然一体化，并不限于中国。问题是我们可能要具体地思考，伴随着这种空间扩张，自治与权力的领域，人、物、信息的移动与流通关系，还有城市与农村双方的社会（空间结构），是如何发生变化的？

最后，与上述几点皆有关系，f.近代城市中的传统小社会（共同体的近邻组织）如何进行保存与重组？关于这一点，日本近代城市史对町内会与町内社会的实际情况进行了关注。在日本的近代社会，总的说来，作为近世社会细胞的町（Cyo）与村（Mura），在明治时代之后依然根深蒂固地存在着，直到正式瓦解的高度成长时期为止，并没有丧失作为社会单位的意义，这一点是很有特征的。不过，其中也存在着差异，城市的町比农村的村更早瓦解，而即便同样是城市，也有所不同。例如，大阪与京都就有着鲜明的对比。这个问题与朝鲜的洞和日本的町的比较、中国近代城市社会的内部结构研究等课题也有关系。关于这一点，我希望也务必进行比较史的探讨。

以上提出了与第一和第二个问题点相关的 a～f 的六个具体论点。

문제제기

사가 아시타

이노우에 토오루 씨의 문제제기의 논점은 ①비교사의 기축을 어떻게 설정할 것인가, ② 도시와 농촌의 관계를 어떻게 파악할 것인가, ③ 권력의 확대 및 영토 확장과 거점도시의 관계를 어떻게 고찰할 것인가의 3 가지로 요약할 수 있다. 문제제기자 역시 근현대 오사카의 도시사를 연구하는 입장에서 두 가지 문제를 제기하고자 한다.

첫 번째로, 예능・문화에 있어서의 18~19 세기의 변용을 어떻게 파악할 것인가를 비교사적으로 논의해주셨으면 한다. 예를 들면, 근세 후기 오사카（大坂)의 조루리 문화의 형태는, 정점에 있는 프로 예능자에 의한 기예의 영역 내에 방대한 아마추어가 존재한다는 문제-a 도시 문화의 민중적 기반의 존재-를 시사한다. 또한, 조루리와 가부키의 흥행 및 그 기반의 형태는 에도와 교・오사카에서도 각각 달라, 이들 도시는 교류를 계속하면서도 또한 대조적이기도 하다. 이러한 b 국내 각 도시의 문화적 차이 역시 논점이 될 수 있을 것이다.

또한, 에도・요시와라(吉原) 유곽에서 게이샤가 유녀로부터 분리된 18 세기의 변화는 그 후 근대 유곽 사회의 보급・확대 및 게이샤마치 (町)의 족생이라는 사태와 이어지는 것이었다. c 18~19 세기를 걸쳐, 도시와 농촌 양 쪽으로 미친 예능・문화의 보급과 개량(근대적 재편)이 이루어졌던 문제를 동아시아 레벨에서 비교하는 것, 이것도 논점이 될 수 있을 것이다.

두 번째로, 이노우에 씨의 논점 ①②③ 전부와 관련해서, 전통도시에서 근대도시, 혹은 현대도시로의 이행을 어떻게 구체적으로 파악할것인가에 대한 문제이다. 여기서는 근대 오사카의 예를 언급하여 구체적 논점을 3 가지 정도 제시하겠다.

먼저 d 조계·거류지 건설 및 서양화가 기존의 전통도시에 어떠한 변화를 야기했는가에 대한 질문이다. 오사카에서도 개항에 따라 1868 년 가와구치（川口）거류지가 개발되었는데, 매우 소규모인데다 오사카가 무역항으로서 부적절했기 때문에 이 거류지는 그 역할이 거의 교육・문화거점에 머물러 오사카 전체에 대한 영향력은 경미한 수준이었다. 한편, 중국 상하이（上海, 이하 상해)와 조선 식민지도시에서는 기존의 전통도시와 병존하면서 혹은 그것을 압도하는 형태로 조계・거류지를 핵심으로 한 근대도시가 건설되었으며, 그 영향은 상당히 큰 것이었다고 보여진다. 그러나 상해 조계에는 다수의 중국인이 유입되어, 조계 내부에서는 반대로 서구형 근대도시의 전통적인「이전」도 행해졌다고 예상된다. 한편 요코하마와 고베에 비해 거류지의 영향이 크지 않았던 오사카에서도, 서구 근대적인 전통도시의 형성・확대는 근세 무가지_武家地 터의 이용을 중심으로 진행되었다. 따라서 서구화 및 식민지화・반식민지화에 따른 근대도시공간의 형성은 표면적인 파악에 그치기보다, 내부의 사회=공간구조의 모습까지 헤집고 들어가는 형태로 파악해야 할 필요가 있다.

다음으로, e 도시공간의 확장과 사회의 도시화가 어떻게 진행되었는가에 대한 문제이다. 도시의 근대화는 시가지의 공간적 확대 (스프롤 현상)와 불가분의 형태로 진행되었기 때문에 이노우에씨가 지적한 도시농촌의 혼연일체화는 중국에서만 한정된 것이 아니다. 문제는, 이러한 공간적 확대에 따라 자치와 권력의 영역, 사람・물건・정보의 이동・유통관계, 혹은 도시・농촌 쌍방의 사회=공간구조가 어떻게 변화했는가를 구체적으로 고찰하는데에 있을 것이다.

마지막으로, 지금까지 든 내용 전부와 관련된 것으로, f 근대도시 안의 전통적인 소사회 (공동체적 근린조직)의 잔존과 재편이 어떻게 진행되었는가에 대한 문제이다. 이 점에 관련해서 일본 근대 도시사에서는 쵸나이카이（町内会）혹은 쵸 내의 사회 실태가 주목되어 왔다. 일본 근대사회에서는 대체로 근세사회의 세포였던 쵸（町)와 무라（村)가 메이지 시대 이후에도 살아남아 고도성장 이후 본격적으로 해체되기까지,

그 사회적 단위로서의 의미를 상실하지 않았던 점이 특징적이다. 그러나 여기에도 차이가 있어서 농촌의 무라보다 도시의 쵸가 해체가 빨랐으며, 같은 도시라도 각각 달랐다. 예를 들면 오사카와 교토는 상당히 대조적이다. 이 문제는 조선의 동（洞)과 일본의 쵸의 비교, 중국 근대도시사회 내부구조연구 등의 연구과제에도 연결된다. 꼭 이 점을 비교사적으로 논의해주었으면 한다.

이상, 첫 번째와 두 번째 항목에 걸쳐, a～f의 6가지 구체적 논점을 제기하겠다.

Problem presentation

Saga Ashita

Toru Inoue provides three points concerning the problem presentation. They are: 1) how should we set up the criterion for comparative history, 2) how should we comprehend the relations between city and village, 3) how should we comprehend the relations between extension of power and territory expansion, on one hand, and base city on the other. I would also like to present two problems from the point of view of research of the urban history of Osaka in modern and contemporary era.

Firstly, how should we comprehend the changes in entertainment and culture during 18-19th centuries? I would like to discuss this from the perspectives of comparative history. For instance, the situation with joruri culture in late-early modern period Osaka gives us suggestions concerning a) the presence of a popular basis of culture in a city, the problem when many amateurs were present in the sphere of art that was practiced by top-class professional performers. In addition, the situation with entertainment such as joruri and kabuki, as well as their basis, has been different in Edo and Kyoto-Osaka areas, and though these cities had mutual communication they were antithetical to each other. So I think that such b) cultural differences in cities within the country might become another point for discussion.

Moreover, changes in Edo's Yoshiwara red-light district in 18th century, when geishas were separated from prostitutes, also led to spread and expansion of red-light district society in modern times and to appearance of geisha towns. Comparison of c) the problem of spread and reforms (modern reorganization) in entertainment and culture in both urban and rural areas during 18th-19th centuries at east-Asian level – this will also become a point for discussion.

Secondly, there is a problem concerning how should we consider the shift from traditional city to modern city or contemporary city with regard to all three points argued by Mr. Inoue. Here I would like to offer three specific discussion points focusing on modern period Osaka city.

First, we should consider the following problem: d) what changes did the construction of foreign settlements and concessions, as well as Westernization, bring to the existing traditional city. When the port of Osaka has been opened to foreign trade, The Kawaguchi Settlement was constructed, but it was a very small-scale foreign settlement, and because Osaka was unsuitable as a trade port, the functions of this settlement were generally limited to becoming the center for education and culture, making its influence on Osaka as a whole negligible. On the other hand, one can state that in Shanghai in China and in colonial cities in Korea, modern cities with centers around foreign settlements and concessions have been constructed in the form of co-existing with or sometimes even surpassing traditional cities, and the influence of such cities was quite big. However, an influx of many Chinese people to settlements could be observed, and we can predict that within them, on the contrary, the traditional "relocation" as in Western-style modern cities also occurred. At the same time, even in Osaka where the scale of foreign settlements was smaller compared to Yokohama and Kobe, the formation and expansion of European modern urban space took place mainly by redeveloping former sites of the lands owned by samurai families during early-modern times. Consequently, there is a need to understand the formation of modern urban space

by means of Westernization, as well as colonization and half-colonization, not just by superficial ascertainment, but rather by pushing through in order to understand the inner society=space structure.

The next problem concerns e) the way in which extension of urban space and urbanization of society developed. Modernization of the city developed inseparably from space expansion of the urban area (sprawl), and phenomenon of blending together of cities and villages is not limited only to China. What we need to do is to think specifically how the areas of self-government and power, relations of movement and circulation of people, things and information, or construction of society=space of both cities and villages have been changing.

My last point, which relates to all the aforementioned, concerns f) the ways in which the traditional small communities (community-style neighborhood organizations) within the modern city survived and how they were being reorganized. In traditional urban history in Japan, the actual conditions of neighborhood associations or neighborhood communities have drawn attention with regard to this point. Town (cho:) and village (mura) that were, broadly speaking, the cells of early-modern period society, in modern Japanese society survive deeply rooted even after the Meiji period, and it is characteristic that they did not loose their meaning as social units until they broke apart on the full scale along with rapid economic growth. However, there were differences within these processes as well: dismantlement of cho: in urban areas was faster than that of mura in rural areas, and there were differences even within the same urban area. For instance, the situation in Osaka and Kyoto was quite antithetical. This problem can be connected to such research problems as comparison of Korean Dong and Japanese cho:, as well as research concerning inner structure of modern urban society in China. I would like this point also to be discussed from the perspectives of comparative history.

I would like to present six specific discussion points a~f concerning the first and second problems, as shown above.